

唐人焼窯跡発掘調査概報

——島根県鹿足郡柿木村——

昭和57年（1982）

柿木村教育委員会

序

柿木村と津和野町の境界近くの杉ヶ峰をしばらくおりた所に、唐人屋という集落（今は1戸だけとなっているが）があり、古来、唐人の聞いた跡ありといわれ、時折その当時を偲ばせる焼物が発見されておりました。

唐人屋には藩政当時は参勤交替にも利用されていた陰陽を結ぶ津和野藩の幹線道路が通っていましたが、自動車交通が盛んになるにつれて迂回路の県道が開設されて以来、人通りもまれな邊境となっていました。

唐人焼の存在を伝える古記録などが明らかになるにつれ、この貴重な文化遺産を形を損うことなく、早急に調査解明をしなければという考え方方が、村の文化財審議委員会でも強く打ち出され、昭和56年度国庫補助事業として発掘調査を実施され、謎となっていた唐人焼窯の全容が明らかとなり、ここに調査概報が発刊されるに至りましたことは、柿木村の歴史を解明する上からも、柿木村の貴重な文化遺産を保存する上からも誠に初期的な事業であり、よろこびにたえません。

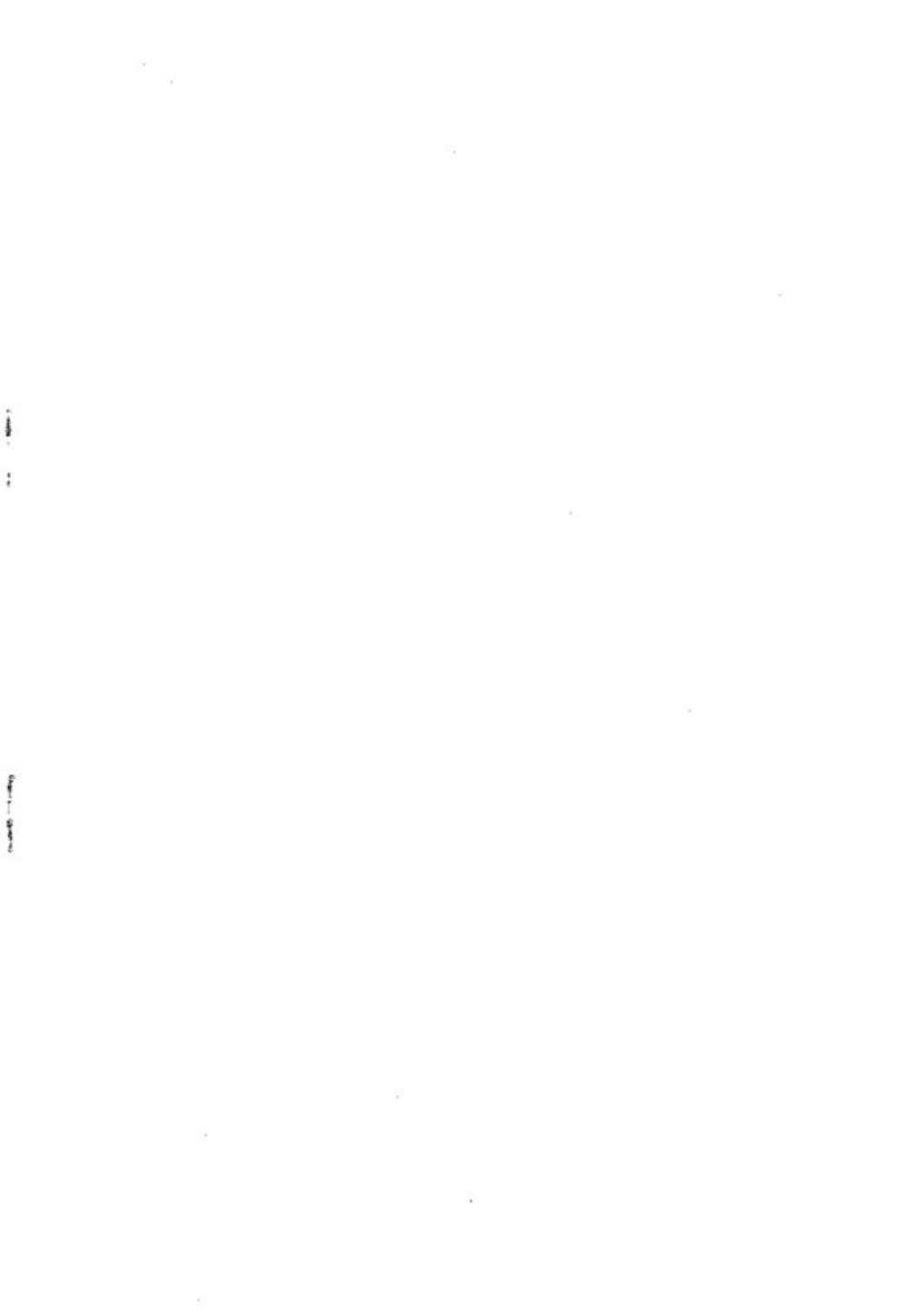
この発掘調査にあたっては、島根県教委文化課、島根県立博物館村上勇学芸員をはじめ、村内外多数の皆様から格別の御支援御協力を戴き、お蔭をもって今日あるを得たわけで、各位の御高配に対し深甚の感謝と敬意を表するものであります。

現地は覆土して保存してありますが、近く大規模林道もすぐ傍に建設され、夢の唐人屋に2車線の道路が貫通し、一躍脚光を浴びることになりましょう。

すぐれた景観と自然条件に恵まれたこの地を、この文化遺産の保存にふさわしい「唐人焼の里」となるよう力を尽したいと考えております。

昭和57年3月

柿木村長 河野鶴雄



凡 例

1. この概報は柿木村教育委員会が昭和56年度の国庫補助事業として昭和56年10月から昭和57年3月まで実施した島根県鹿足郡柿木村福川字唐人屋に所在する唐人焼窯跡の発掘調査にかかるるものである。

1. 発掘調査事業の組織は下記の通りである。

主 体 者 柿木村教育委員会 教育長山口岩男

事 務 局 柿木村教育委員会 社会教育主事師井志延 派遣社会教育主事岩田道雄
主事人庭洋子 嘴託田淵治 事務員藤本智子

調査担当者 島根県立博物館 学芸員村上勇

調 査 員 柿木村文化財審議員 藤本一十 万瀬幸男 河野貢 村上英明 土田寛治
遠田得庵

調査指導 出光美術館 学芸員弓場紀知 島根県埋蔵文化財調査員谷建三
島根大学教授原宏 島根県教育庁文化課 主支藤間学
埋藏文化財第二係長石井悠 主事川原和人 開芸家木村聰司

調査協力 岩国歴古館 学芸員宮川伊津美

1. 作業にあたっては下記の方々の協力を得た。(敬称略)

万瀬幸男 上田寛治 早田竹雄 村上正男 大出藏 水崎留夫 大橋隆司 三浦謙二
齊藤隆子 斎藤龟枝 川本ソキエ 石飛博志 河野のり子 田村礼子 斎藤定子

1. 本書の編集、執筆は村上勇が行なった。

1. 造物の実測、図面の作成は青木博、竹田豊、河部初美、井上洋子、小原明美の各氏の協力を得た。

1. 本調査には地上益成二郎氏のご協力を得た。ご好意に対し記して感謝する。

目 次

I 発掘調査による紹介	1
II 遺跡の環境	
1 遺跡の位置と周辺の環境	1
2 歴史的環境	2
III 調査の概要	4
IV 遺構と遺物	
1 遺 構	7
2 遺 物	22
V 検討	28
VI まとめ	33

I 発掘調査に至る経緯

店人焼窯跡は当地方の古記録である『古賀記』に記述があり、その内容が事実であれば、島根県下で最も古い陶器窯の一つであり、窯の存在は以前より注目を寄せていた。
⁽¹⁾
⁽²⁾

柿木村では、昭和50年3月に文化財保護を目的に文化財保護条例を設け、文化財審議委員会が委嘱されて活動を行なっていたが、昭和52年の踏査中に窯壁片らしきものを発見した。昭和55年、柿木村文化財審議会は村長に対し窯跡を村指定文化財にするよう建議を行ない、村民は土地所有者の同意を得て11月に文化財として指定した。

これと前後して村史編纂事業計画が立案され、柿木村の歴史に重要な位置を占める文化財として唐人焼窯跡の実態の把握が要請されたので、昭和56年3月の村議会で発掘調査が案件として提出され、同件は承認された。これを受けて、柿木村教育委員会は島根県教育委員会と協議を行ない、昭和56年度の図書補助事業として発掘調査を実施するに至った。

(1) 『古賀記』昭和56年六日市町教育委員会

(2) 伊藤菊之輔『島根の陶窯』昭和42年

沖本常吉「古見氏の長門退転と滅亡」『津和野町史』第1卷昭和45年、津和野町史刊行会

村上勇「山陰」「世界陶磁全集」第7巻(江戸二)昭和55年、小学館

II 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の環境

唐人焼窯跡の所在地は島根県鹿足郡柿木村福川字唐人塚である。図1でわかるように細長い島根県の南西隅にあたり、県庁所在地の松江から柿木村役場まで203km、そこからさらに12kmばかり山中にに入ったところであり、直線距離約2kmで山口県に至る中国山地の直中といえるところにある。

近くを吉賀川の支流である梶谷川が流れしており、遺跡の前面にもこの一枝流が小渓谷を形成している。梶谷川は柿木で六日市方面から流れてきた吉賀川と合流し、日原で津和野川と合流して高津川となって益田市から日本海へ流れ込んでいる。六日市からは岩国に、柿木からは徳山に近く、この高津川沿いは陰陽の連絡路の一つになっている。

柿木から津和野へは福川から折橋を経て青野山の麓を通って街道が通っている。今は折橋から沼原の東通りが七要路であるが、かつては唐人塚、杉ヶ峰経山がもっぱら利用された。津和野藩の参勤交代もこの道を江戸に向ったといい、吉賀地方の人々にとどても昔なつかしい往還である。図2は明治34年版大日本帝國陸地測量部発行の5万分の1地図の当該地域であるが、この往還が当地方の主要交通路であったことを良く表わしている。唐人焼窯跡は眼下の渓流沿いにこの街道を見下しており、周囲はもちろん中国山地の山々に囲まれている。

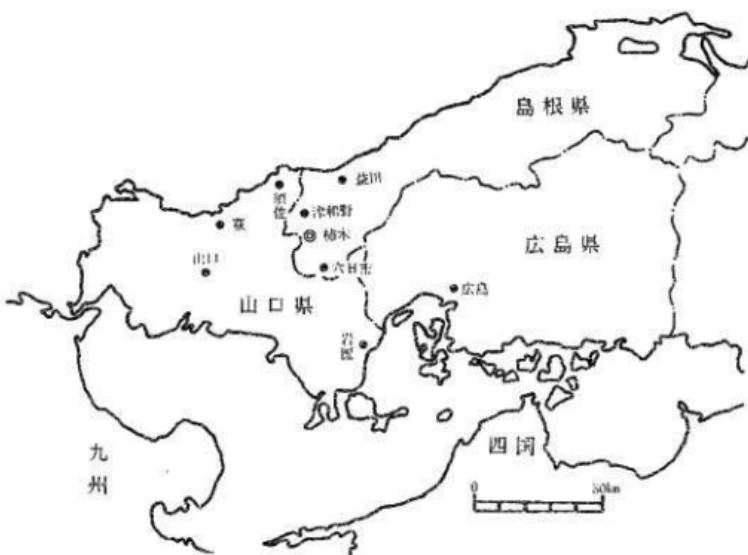


図1 位 置 図

附近は中渾山地でもナラ林を中心とする中間温帯林に属し、丘陵周辺部には多くササの群生する姿がみられる。地質学的には、杉ヶ岬から福川に至る周辺の山地は、古成層を覆って、閃雲花崗斑岩と中生代白亜紀に生成した石英斑岩が卓越して見られる地域である。筑山から折橋を通って福川に下る県道線では閃雲花崗斑岩中に石英斑岩が岩脈をなして貫入しており、逆に篠山木野から杉ヶ岬を越えて唐人屋に下る道では閃雲花崗斑岩が石英斑岩の中に小範囲ながら露出している。⁽³⁾標高 907.6 m の省野山は大きく遅れて、新世代第四紀洪積世における火成活動によるもので、幼年別トロイデ地形をして、その姿はこの地方の人々に親しまれている。

2. 歴史的環境

西石見山間部については、これまで岩谷建三氏を中心にした地道な踏査によって、遺跡数は相当知られており、星坂遺跡のように著名なものもあったが、発掘調査が行なわれたものは皆無に近く、不明な点が多くあったのは否めない事実であった。近年実施された中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査によって、ようやく具体的な内容が知られるようになったといって大過あるまい。⁽⁴⁾

柿木村を流れる吉野川流域では、六日市町で押型文土器が発見されたように、縄文時代前期

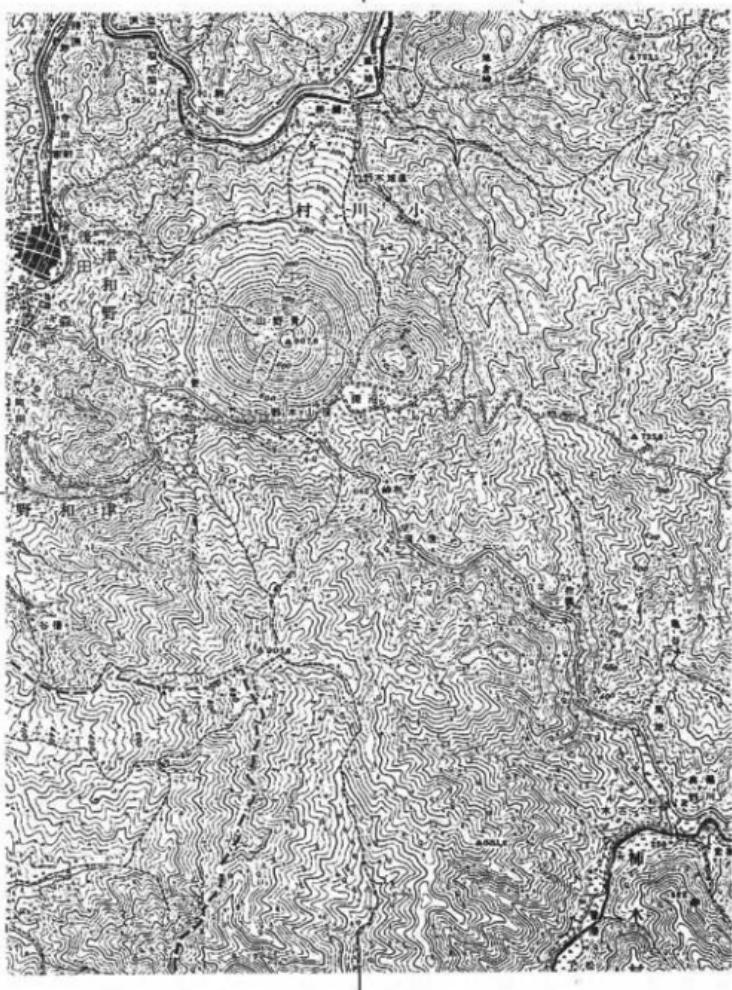


図2 地形図（5万分の1）

の文化が確認されている。また、弥生時代の星坂遺跡・前立山遺跡や古墳時代の石積古墳に代表されるように、この流域が相当発展していたことは、周辺の市町村誌の記述するところであり、奈良時代の郡衙跡に比定されている建物も調査によって明らかになった。

この地域の歴史的な社会変遷は、基本的には農山村の生産の力を基盤にしたものであったことは容易に推測されるところであるが、瀬戸内と山陰を結ぶ交通主要路としての役割的重要性も古くから指摘されている点である。

中世の生活についても、近年出土品を通じてその一端が徐々に明らかになりつつある。例をあげると、津和野町木曾野の吉見氏館跡と伝える御所扇敷遺跡から白磁碗片、津和野大蔵から割花文のある青磁碗片が採集されている他、柿木村の新井ヶ原からも中国製の白磁碗片と土師器皿が発見されており、六日市町九郎原遺跡の発掘では中世末期に使用された中国製の青花碗、皿片が出土している。これらは、この地方の土豪の生活内容の一部を指し示していると推察され、少なくとも室町時代前半には、柿木村福川一帯に勢力をもった土豪の存在が考えられる。新井ヶ原には駕籠・陣屋敷・矢創・風呂屋・鍛冶などの地名が残り、東側には天文八年吉見正頼の家臣であった斎藤氏が築いた三ノ瀬城がある。

このような日本国内における多量の中国陶磁の消費は、16世紀末におこった、「やきもの戦争」とも呼ばれる、文禄・慶長の役前後を境に、直接的には朝鮮陶工による日本国内での生産を契機として、飛躍的な陶座陶磁の出現をうながすことになったのは周知のことである。すなわち、唐津・上野・高取・薩摩・萩を始め、日本で初めて焼成された磁器である伊万里、さらに九州より新形式の窯構造が伝播した美濃、及び独特の様相をもって発展した京焼にいたるまで、おおよそ近世国産陶磁器の源流はこの時期に出現を見たといつて差し支えない状況である。

したがって、中世を通して山陰海岸を基地とした貿易でもその名を知っていた吉見氏が、こうした国際的な環境の中で、文禄の役に毛利元康の部隊に吉見元頼を、慶長の役に毛利秀元の部隊に吉見広行を出陣させたことによって、他の西国大名と同様に、自国内の産業育成のために陶器の生産に目を向けたとしても何も不思議なことではなかろう。

(3) 下間忠夫「津和野町の地質」『津和野町史』第1巻昭和45年、津和野町史刊行会

(4) 島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年

III 調査の概要

調査は、昭和56年10月末から昭和57年3月末まで行なったが、途中積雪のため12月後半から翌3月半ばまでは作業を中心せざるを得なかった。開始にあたって、文化財審議委員の踏査と調査担当者のこれまでの知見から、窯跡と考えられる地点を中心に樹木の伐採を行ない、関連地域の地形測量を行なった。附近は一部雑木の繁茂がみられたが、村建設課の協力によりこれを遂行することができた。

すでに窯跡と考えられる地域の一部は、後世の開拓事業のため、地形測量図に見られるように段々畠のようになっており、発掘時には杉が植林してあって土止めの石垣を壊すことができないので、それぞれの段に応じて任意の地点にグリッドを設定した。結果的には第4図に見ら

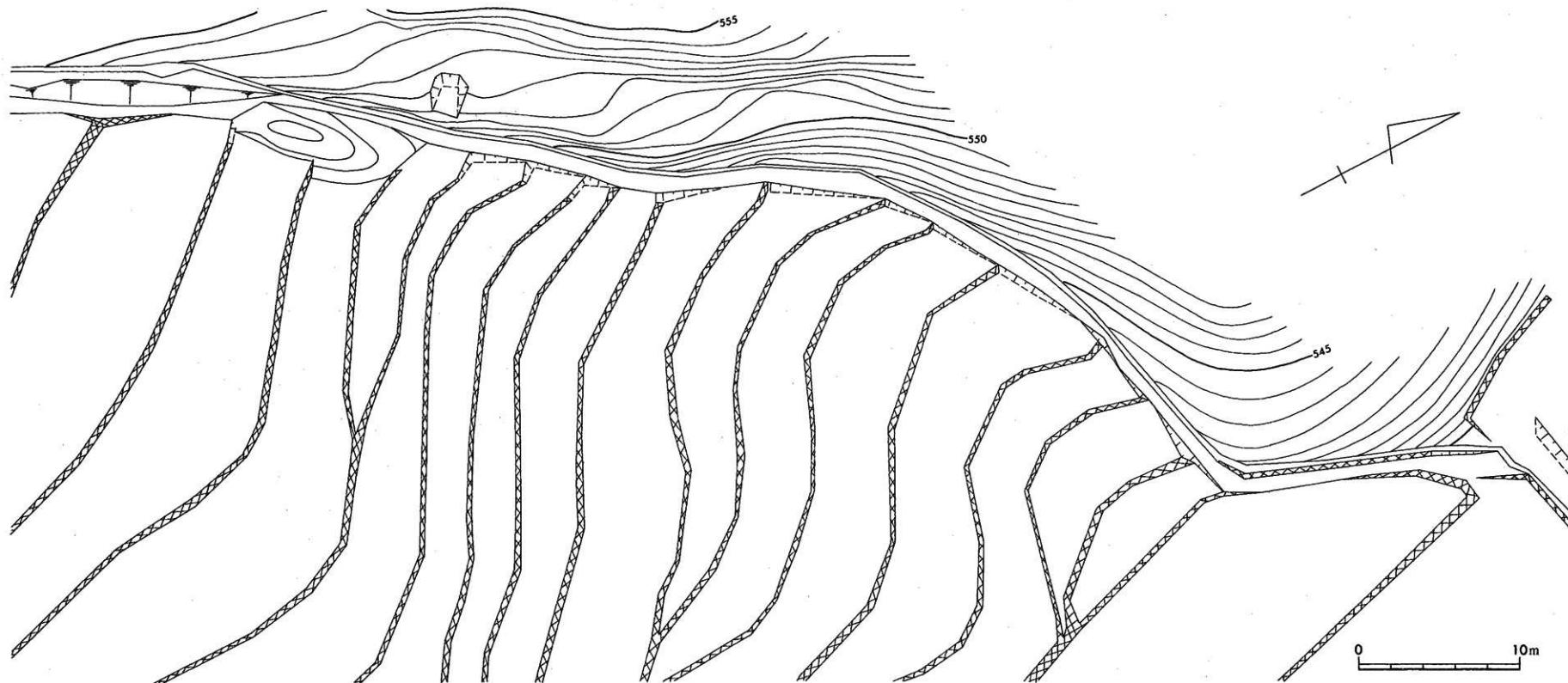


図3. 地形測量図

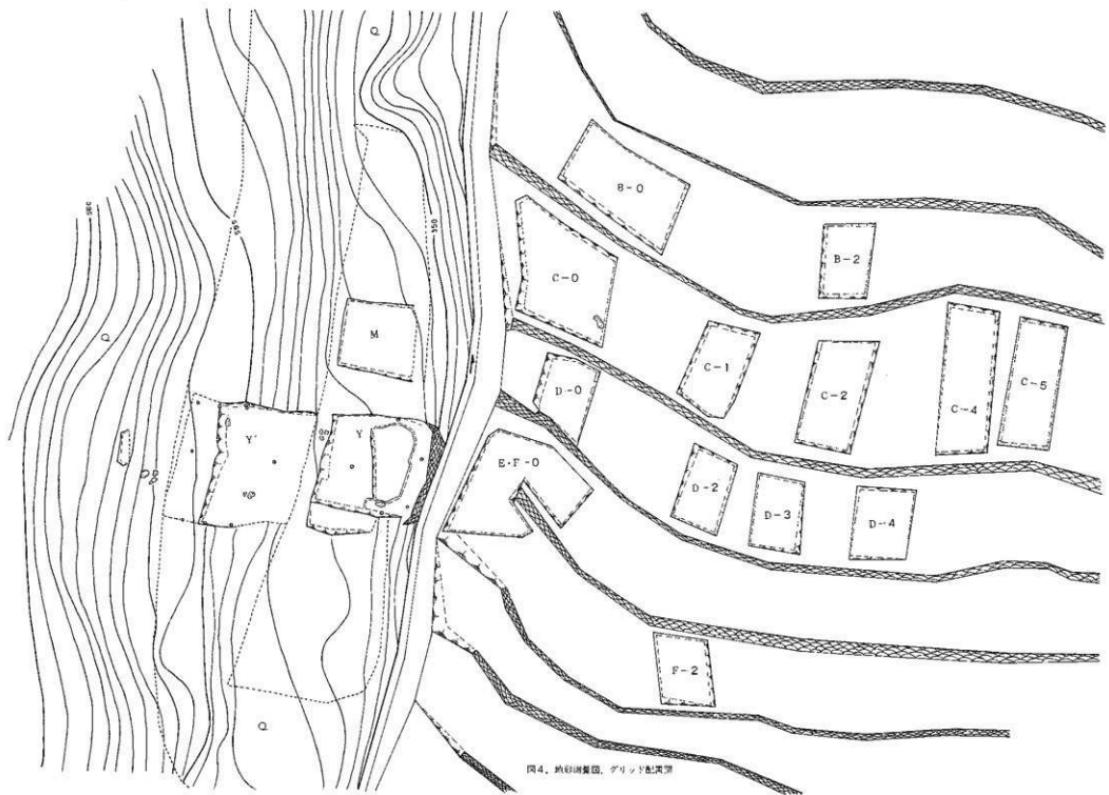


図4. 地形測量図、グリッド配置図

れるように16のグリッドを設けたことになり、さらに、予想された地点より高位に窯体が現われたので、その部分を中心に地形測量を一部追加して実施した。

当初、小丘陵の東側を中心に窯体の存在を考えたが、結果的にはこの周辺は地山が比較的浅い所にあらわれて遺構はC-2区の小土壤を除いて確認できなかった。しかしながら開田以前の旧地形を復原する事が可能となり、旧地形はB-0・C-0区が現状より標高が低く、C-4・C-5区が標高が高くより突出していたことが確認された。

Y区は窯体の部分であることをすでに確認していたので、物原を検出するためM区を設定した。若干の窯道具と陶片が出土したが、物原といえるような出土状態でないので、新たにD-0・C-0・B-0区を設定したところ、C-0・B-0区において多量の破片等が出土してこの部分が物原ではないかと推察された。

Y区に現われた窯体はこの部分が後世の開田の際に土取りされたり、苗床に使用されたにもかかわらず、窯体の巾分だけは比較的保存も良かったので、ある程度の規模を推測することができる。

また、E・F-0区及びD-2区に窯の微候が認められなかったので、Y'区を設定したところ、上部に窯体の一部が現われ、この窯が極めて傾斜の強い特徴的な構造をしていたことが確認されることになった。

なお、Y'区は傾斜が強く、遺構面が地表から浅いため表土を剥ぐ程度にとどめ、Y区においても今後の本格的な調査を考えて、窯体部の半分は清掃程度にとどめた。さらに、あるいは窯の焚口を予想することも可能であるE・F-0区・D-0区とD-2区の間も同様の理由で調査を差しつかえたので、窯の全長についてはなお解決すべき点があるとはいって、窯の位置と大体の規模及び焼成された製品の把握という当初の目的は今回の調査によって達成することができた。

IV 遺構と遺物

1. 遺構

F-2区、耕作上である暗灰色シルト質砂層が深さ20センチ程あり、その下に燈黄色砂層が

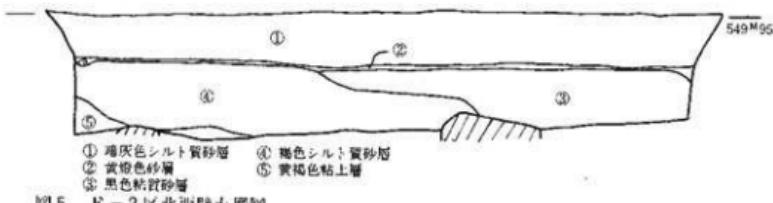


図5 F-2区北西壁土層図

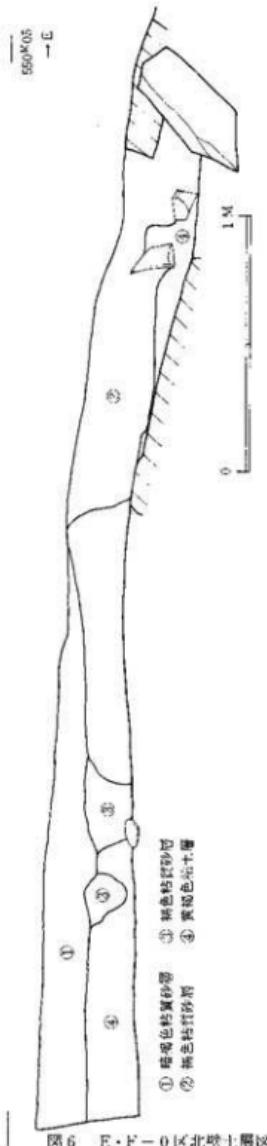


図6 E・F-0区北壁土層図

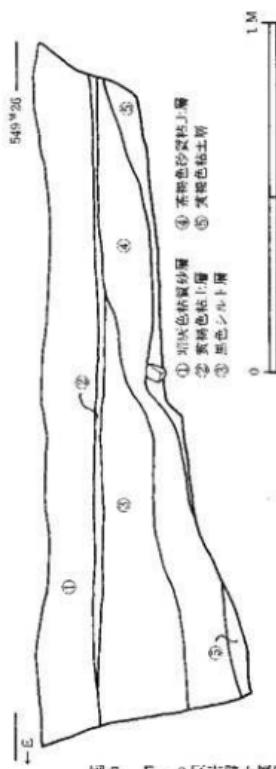


図7 E-0区南壁土層図

厚さ2センチ堆積している。かつての水田の基盤層と考えられ、鉄分を含んで堅い層となっている。黒色粘質砂層は江戸時代後半以降の磁器片を含んでおり、開田の際の埋土と察せられる。褐色シルト質砂層は角礫を含んでおり旧地表面を形成している土層である。黄褐色粘土層は地山であり、大きな角礫を大量に含んでいる層である。(図5)

E・F-0区、北壁土層図(図6)でわかるように、地表から15~25センチの厚さで窓体壁片や地山

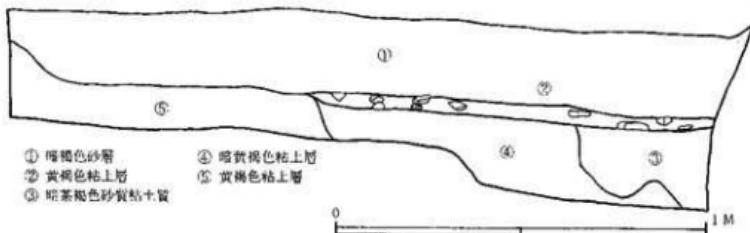


図8 D-0区北壁土層図

の角礫で埋めつくされており、小道の脇にあたるため後世に相当擾乱を受けている。窓の焚口に近い側面と思われるがその微鉄を検出することができなかった。図7はE-0区の南壁土層図であるが、旧地形の復元ができる他は、造構の確認はできない。第3層の黒色シルト層は灰分を含んでおり、後に記すように、この地点からC-1区にかけてはかつて多量の灰が堆積していたことがわかる。

D-0区、上部20センチが耕作土である。第2層の黄褐色粘土層は小角礫が多量に混入する埋土の層である。第3層はグリッドの東側で検出された暗茶褐色砂質粘土層であり、この層も埋土された層と考えられる。暗黄褐色粘土層と黄褐色粘土層は共に地山であり、後者は特に角礫が混入している。また、このグリッドの第1層から江戸時代の後期以降と考えられる磁器片と陶器片が出土している。

以上のようにD-0区の堆積状況も良好なものではなく、地山を埋土層が直接覆っていることが看取された。(図8)

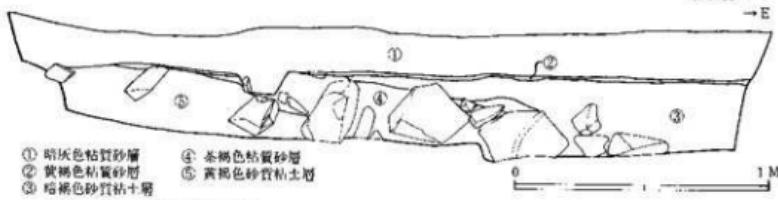


図9 D-2区北壁土層図

D-2区、厚さ15センチの耕作土である暗灰色粘質砂層の下層は、低所に開田時の埋土層である暗褐色粘質砂層が見られるだけで、角礫を大量に混入する地山がすぐに現われ、掘削が困難な状態であった。(図9)

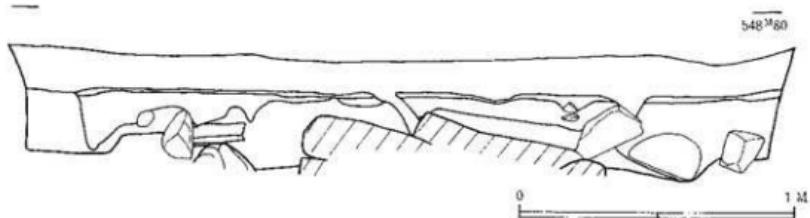


図10 D-3 区北西壁土層図



- ① 黑灰色砂質粘土層
- ② 黄褐色粘質砂層
- ③ 黄褐色粘質砂層
- ④ 黑色砂質粘土層
- ⑤ 黄褐色粘質砂層
- ⑥ 黄褐色粘質砂層

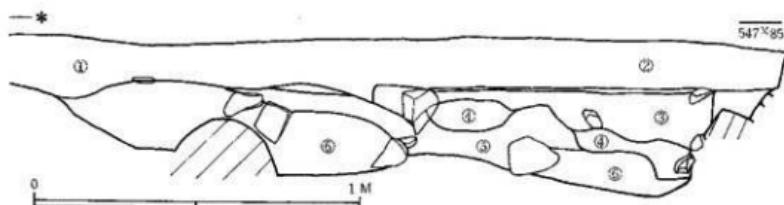
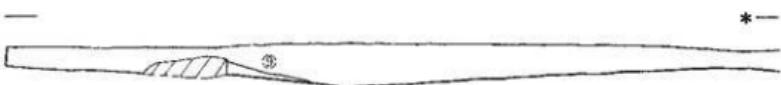


図11 C-5 区北西壁土層図



- ① 黑褐色粘質砂層
- ② 黄褐色粘質砂層
- ③ 黄褐色粘質砂層
- ④ 黑褐色粘質砂層
- ⑤ 灰色砂質粘土層
- ⑥ 黄褐色粘土層
- ⑦ 黑色砂質粘土層
- ⑧ 黄褐色粘土層
- ⑨ 黄褐色粘土層

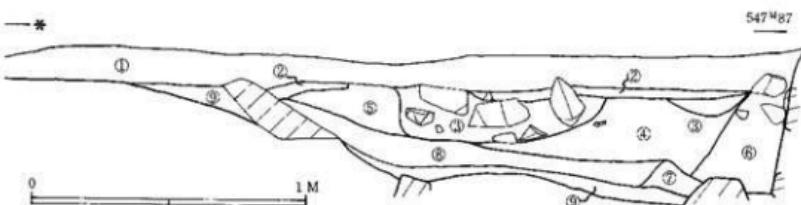


図12 C-4 区北西壁土層図

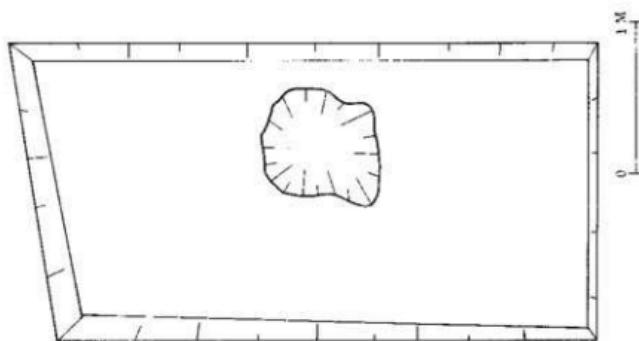


図13 C-2区グリッド

D-3区、耕作土である
暗褐色粘質砂層が10~15セ
ンチあり、鉄分を含む薄い
第2層目の下に、同じく鉄
分を含む灰褐色粘質砂層が
ある。この層が凹地面であ
ると思われるが、この層以
下には一辺が20~50センチ
の角礫が多量に混入してお
り、それは地山も同様であ
って上層の状態は良くない。
なお第4層の湖褐色粘質砂
層は埋土層である。(図10)

D-4区、地表面から10
~15センチの耕作土があり、
その下層はすぐに地山であ
る角礫混りの黄褐色粘土層
である。

C-5区、15センチの厚
さの耕作土の下層は西側は

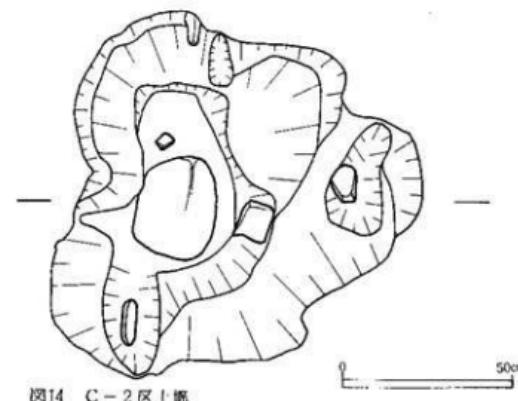
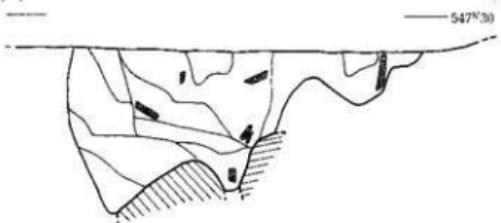


図14 C-2区上層

すぐに地山の角
礫混りの黄褐色
粘砂層になる。
地山は北側にゆ
く傾斜をして
おり、北側西で
は、田の床土を
なしていたと考
えられる鉄分で
固まつた粗砂塊
を含む黄褐色粘
質砂層の下に、
ブロック状に燈
色の焼土や窯体
の一部を含む褐
色粘質砂層が見
られる。第4層
の黒色砂質粘
土層も窯体の一
部や窯灰釉のか
かった陶片を探
集したことから
開拓時の埋土の
層と考えられる。
またこの層は灰
分を含んでいる。
第5・第6層は
地山層である。

C 4区、C
のグリッドも基
本的な土層はC

-5区と同様で 図15 C-2区北壁上層図

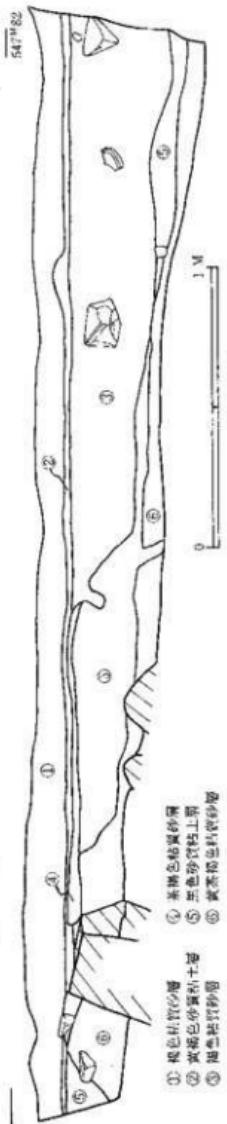
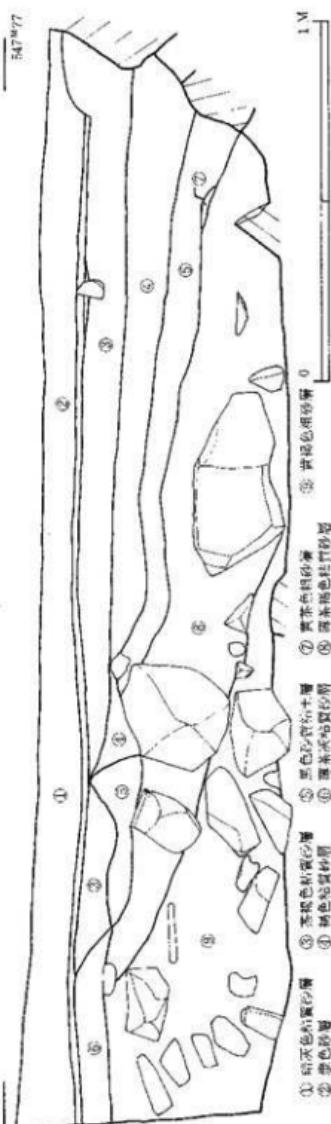


图16 C-1区北壁十周网



ある。第8層がC-5区の第4層に相当する。やはり灰分を含んでいる。C-4区の第4層の黒褐色粘質砂層や第2層の黄褐色粘質砂層には陶片や素焼きの破片や焼土が混入しており、その量が、C-0・B-0区を別にすればB-2区に次いで多く20数点を数えるが、このC-4区から出土した遺物は基本的に開田時に移動した土に伴うものである。

C-2区、このグリッドも他と同様に、第1層・第2層の下位に開田時の造成に伴うと考えられる第3層の褐色粘質砂層が堆積している。かなりの細砂の層で、焼土塊や瓦灰釉の被った陶片が採取された。この層が東に厚く傾斜して下っているのは旧地形を復元せしむるものであるが、旧地表と考えられる棕色砂質粘土層（第5層）がこのグリッドでは良く残っており、地山である第6層の黄茶褐色粘質砂層に掘り込まれた土壤を検出することができた。

土壤は深約1m程の不定形な平面形をしているが、地山断面層（第6層）は大きな角礫を多量に包含する砂層で傾斜しており、掘り込みの面を確認するのは困難であった。土壤は基本的には2段に掘り込まれており、最も深い所で48センチある。底部に径25~30センチの石が現われているがこれは地山に伴なうものと考えられる。土壤内は中心部の最下層に木炭を包含した褐色シルト層があり、その上部に焼土層が堆積している。さらに上部は木炭を含む粘質砂層と灰や炭を多く含む褐色シルト層が覆っている。

このグリッドの第5層黒色砂質粘土層自体灰分を含むものであるが、これが山地表面と考えられ、しかも安定して東側に傾斜して堆積しているので、この土壤は開田時以前の、窯の操業の時点に伴なうものと考えられるがその性格は明らかでない。

なお、グリッドの西側の壁際において、径25センチのピット様のものが検出されたが深さが5センチ弱の浅いもので周辺は角礫が多く実態が判然としなかった。

C-1区、このグリッドは焚口部分に近いと考えられたが、角礫を多量に包含する地山が表面から25センチばかりの浅い所に現われた。旧地表と考えられる第5層の黒色砂質粘土層は厚さ10センチで東側に傾斜して堆積している。第3・第4層の粘質砂層は埋土層と考えられ、特に第3層は窯道具であるトレンチや細かい焼土塊が混入していた。このグリッドでは遺構を検出することができなかった。

C-0区、C-0区とB-0区は多くの陶片と素焼きの破片が出土した。もっともC-0区南壁断面間に表わされている第3層の茶褐色砂質粘土層は窯壁や陶片を含んでおり埋土層と考えられる。その上に堆積する第1・第2層は耕作に係るものである。

第4層の暗褐色砂質粘土層は旧地表を形成していたと推察される。特に上部に陶片を包含しており、この層の東側、すなわち下手の部分では層の下部で素焼きの破片が出土した。このことから第4層は窯の操業によって短期間のうちに厚く堆積していった様子を窺うことができる。

西壁土層断面図はD-0区に近接した側であり、15センチの耕作土の下にすぐに地山が現わ

れた様子が良くわかる。

B - 0 区、南壁の土質断面図の第1・第2層は耕作土と床土層である。第3層の粘質砂層と第4層の微細砂層は埋土と考えられる。第5層の黒色微細砂層が堆土層と考えられ、概ね15センチの厚さで堆積している。第6層は地山の漸移層で第7層は地山である。

北壁土質断面図の第1・第2層は南壁と同様である。第4層の黒色粘質砂層が南壁の第5層に対応するもので、旧地表土を形成しており、ここでは安定した堆積状態を示している。第4層の粘質砂層は東側の下にいくほど色が減じて褐色となり、木炭を多く含む微細砂層となるが、この層の上部では多量の素焼きの破片が

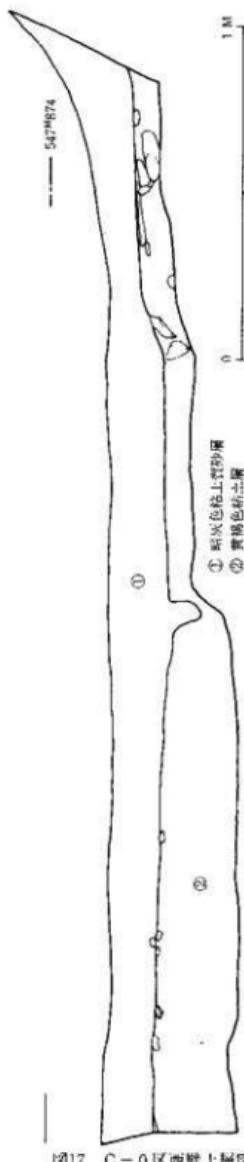


図17 C - 0 区内壁上層図

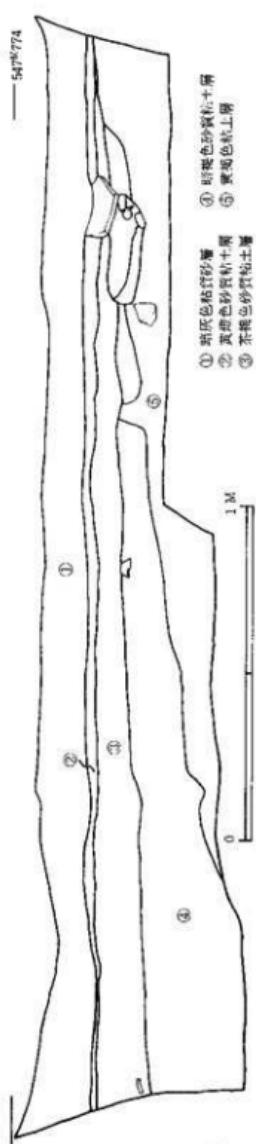


図18 C - 0 区南壁上層図

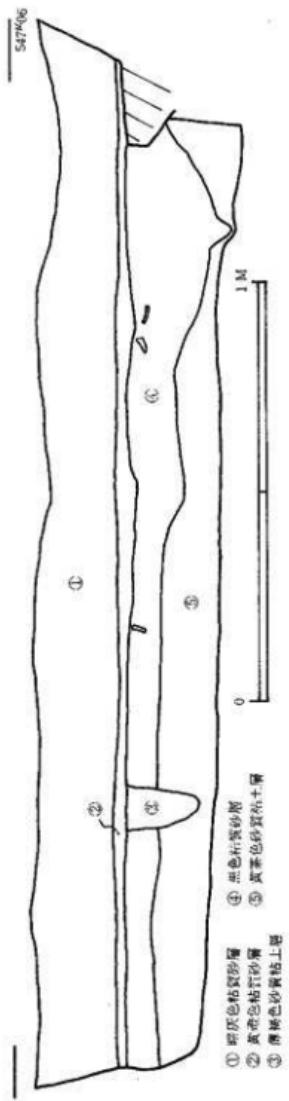


图19 B-0区北壁上层图

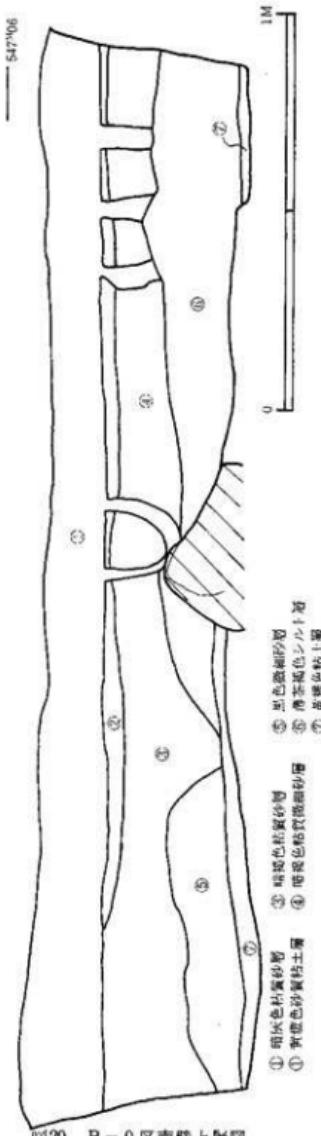
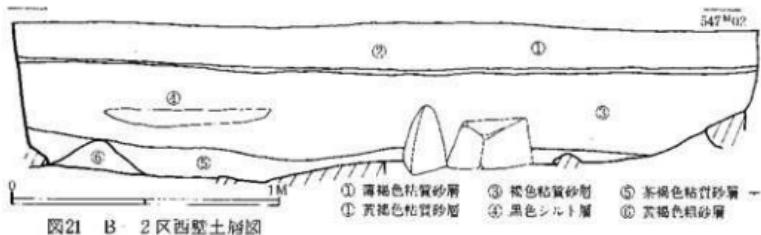


图20 B-0区南壁上层图



散布した状態で出土した。また、C-0区と異なり陶片数が少ないと注意される。他のグリッドに比べ、C-0・B-0区では陶片と素焼きの破片が多く検出されることから、一応この部分が物原と考えられる。

B-2区、耕作土の下の床土である第2層に陶片が若干含まれる。このグリッドでは第3層と第4層の関係が明確にならなかったが、これは第3層内に非常に多くの転石があったためであり、第4層の黒色シルト層が灰を多く含むものであり、この層が濁の操業に伴なって形成された層であることは明らかである。さらに上段のC-2区の旧表土である黒色粘質砂層の存在を

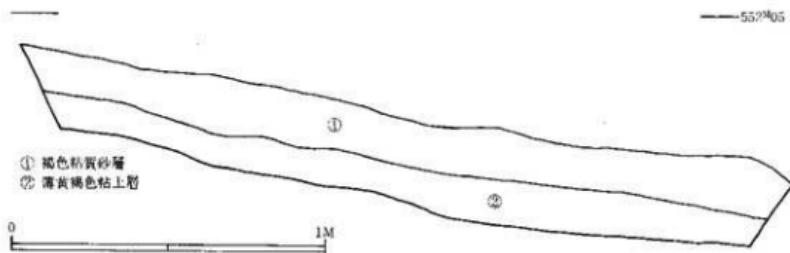


図22 M区北塗土層図

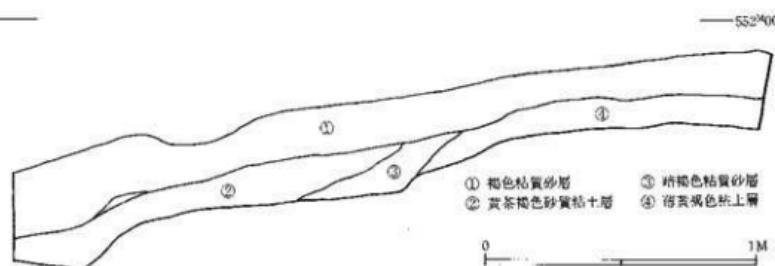


図23 M区南塗土層図

併せ考えると、当時C-2区の方からB-2区方向にかけて土砂が流入しながら早く堆積した状況が把握される。

M区、北駄土層断面図に見られるように15センチ程の表土の下はすぐに地山になっている。このM区のある地点が平坦な面を成しているのは地形測量図に表わされているが、畠田の際やあるいは後世に杉のなえ床として利用した際にも地形の変化を受けたことが考えられる。南壁土層第3層が旧地表の一部であり、それを覆うように窯道具や陶片を混入する統上層である第2層の砂質粘土層がM区の南西側に分布していた。

Y区、窯の木体部分が検出された。このグリッドに見られる焼成室がこの窯の規模や構造を知る上で最も良の資料である。すでに採上と開田によって下下が削平されているが、かろうじて砂床と火床及び通焰口間の柱などが判別される。

窯の巾は左右を隔する平らな石によって測ることができる。これが築窯の際の基準石かどうか明確にし得ないが、Y'区においても火床の縁に熱を受けた大きめの石及びその下位の対称的なところにもそうした石が残っているので可能性は大きいものである。それによると2つの石は内側の距離で2メートル85センチ～90センチ程度を測る。したがって房の壁厚を考慮すると焼成室の砂床の最大巾は2メートル60センチ位になる。砂床の奥行きは80センチまでは確認できた。通焰口間の柱は一部17センチの間隔をもって置かれていることがわかる他はかなり機乱を受けている。なお、17センチの間隔を電視すれば通焰口には当初8本程度の柱が立っていたことになる。火床は通焰口の柱を含めると40センチ～50センチの奥行きをもつ。また火床と奥の砂床部の段差は19センチから20センチであり、火床と手前の砂床との段差は21センチから29センチである。砂床の床面が荒れているのであるが、比較的良好な部分を計測するとこのようになる。

このY区は表土である黄褐色粘質砂層を掘り進める時点で既にこうした遺構が検出される。窯体の窯尻に向って右半分については、砂床の床面を検出のため、清掃を行なって上部の流入したと考えられる窯盤片等をとり除いた。最終時の平面図・断面図が第25図であり、遺構断面中に記入してあるのが室内よわざかに検出された陶片の中の一つで、黄緑色の皿（第28図-4）である。

また、上層断面図はグリッドの東北壁のものであり、黒褐色粘質砂層が当時の地表面の一部である。この層は窓櫻の平坦な石を含むものであって、それから上層の上層は焼窯後に形成されたものである。

Y'区、このグリッドは丘陵の最も高位に設けたもので、当初その傾斜が急なため窯体の存在を考えなかったのであるが、発掘の結果、一部機乱を受けているが窯尻に近い部分と思われる遺構が検出された。窯駄や窯道具・焼土などは最上段の位置で巾2メートル70センチの範囲

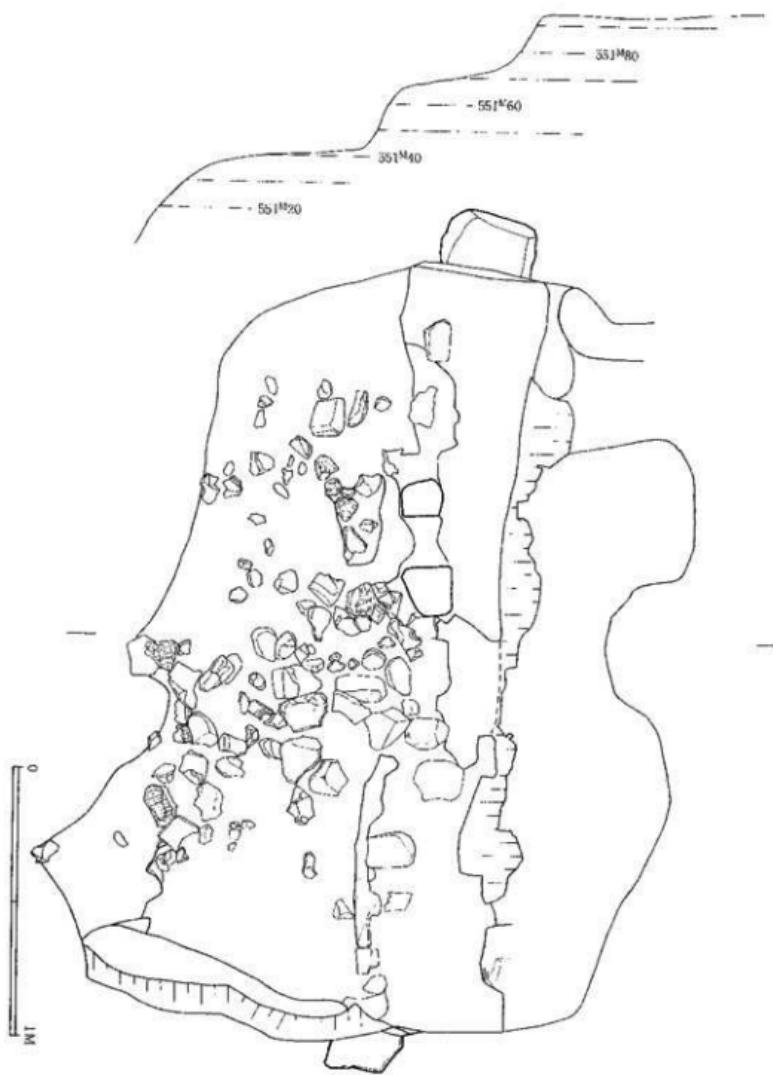


图24 Y区素体部

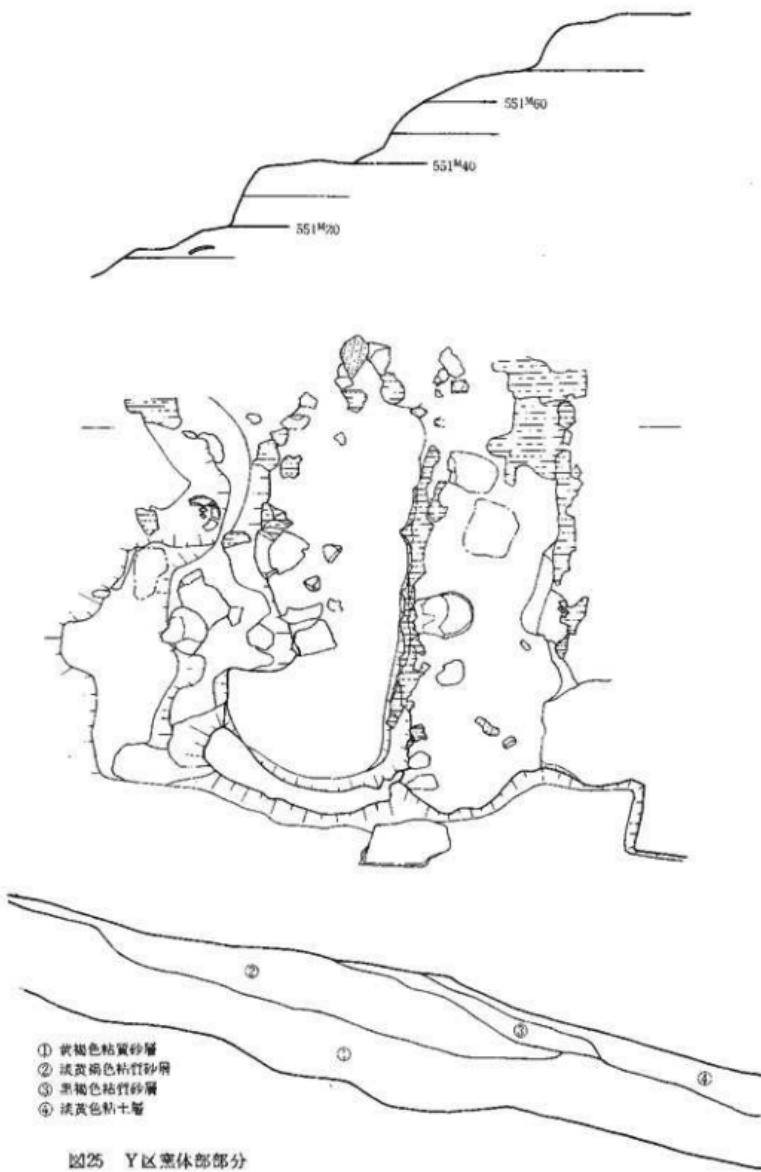


图25 Y区岩体部分

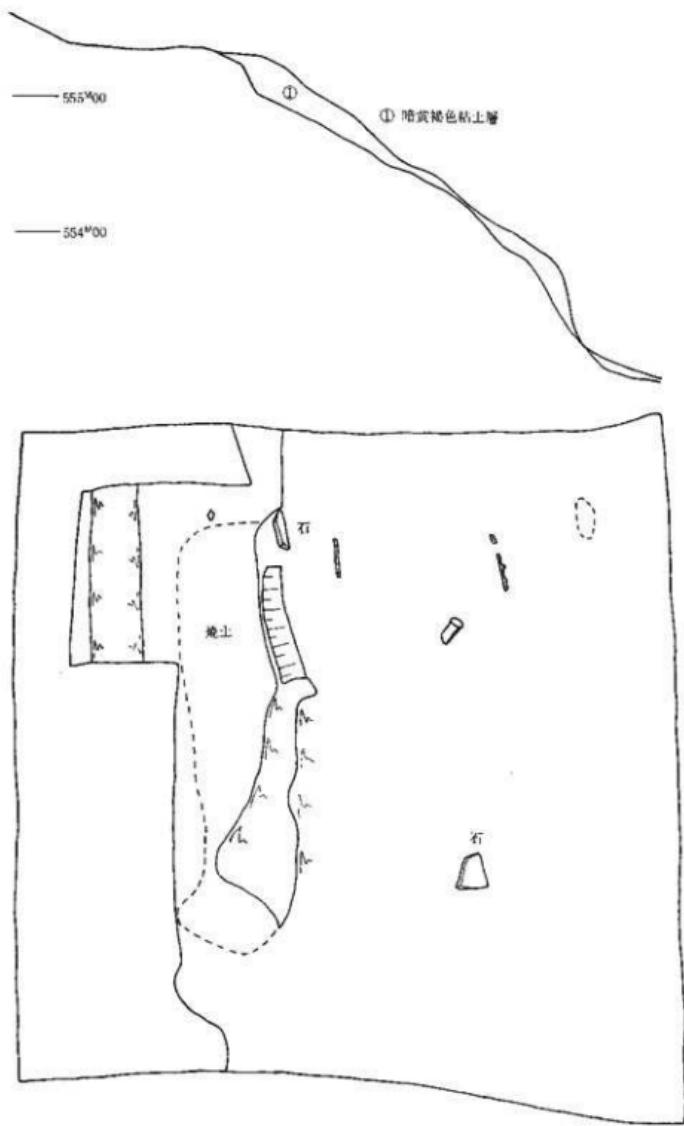


图26 Y' 区造模配模图

に分布しており、下段の方では約2メートルの範囲に集中的に存在していた。壁面が良好に残っている部分が火床の奥壁か砂床の奥壁かいまは明確になし得ない。段の上部で窯道具が採集された点を考慮すると火床の可能性もあり、それより上部に顕著な遺構が検出されなかった点を重視すると窯底の可能性も捨て切れない。いずれにしろこれより上部は一段と傾斜が急になり溶着した壁面より上部では3メートル50センチ離れた部分で若干の火を受けた土層が確認さ

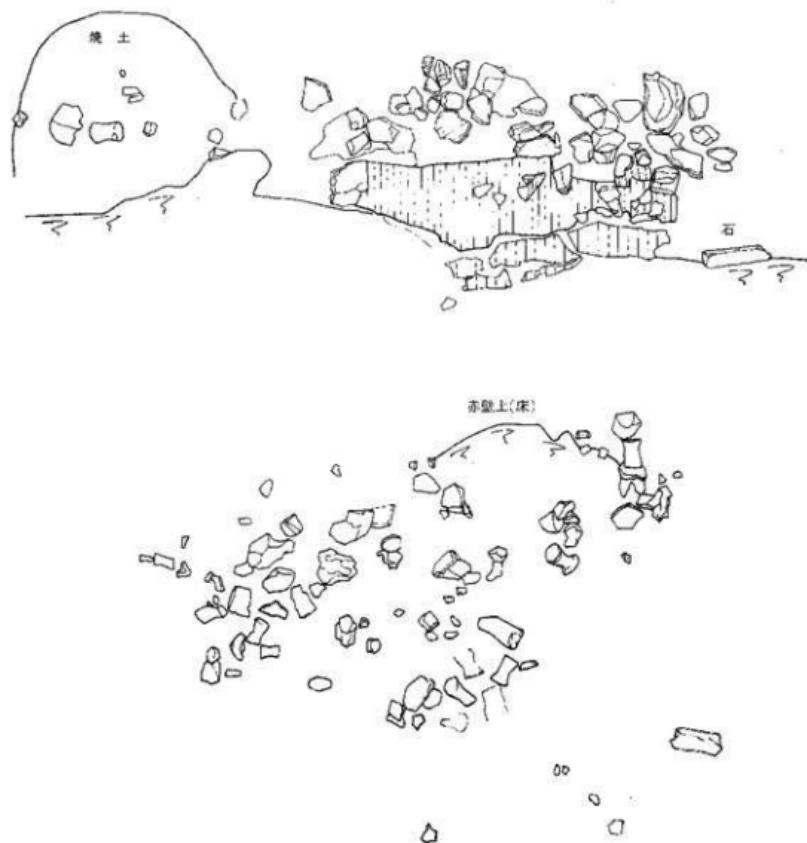


図27 Y' 区窯体部部分

れるにとどまっている。また、段の上面に浅い溝が段とはほぼ平行に走っており、径3~4ミリの小角礫が散在していた。溝は巾が34~38センチで深土が焼土面から20センチで、後世の山道のために削られた現地表からは4~3センチ前後の深さである。

なお、溶着した壁面を奥壁と仮定すると下位にある壺残片との奥行が約40センチ、さらにその壺残片とより下位の壺底片との間が約1メートル20センチとなり、あるいは火床と砂床の関係を想定することも可能になるが、砂床と考えられる箇所の前後では約60センチの高さがあつて、これの性格についてはより下層まで発掘する必要があり、今回の調査では判断を留保せざるを得ない。

2. 遺物

この窯で焼成されたものには皿・碗・鉢・擂鉢・瓶などがあり、窯道具として使用されたものに円形の焼台やトチンがある。

図28の1から12は皿である。いずれも内湾するもので、比較的大きな破片による推定復原口径は11.5センチから13.5センチである。口唇部は丸味をもち、胴部の下半あるいは三分の二以下を笠削りによって調整するため、その部分にやや鋸歯状な接線がつく。釉薬は3を除いて土灰釉が剥けられており、黄緑色を呈している。3は内面は部分的に暗黄緑色を呈するが釉の無い部分と外面は青味を帯びた失透白色となり、内面の一部の良くなじけて流れているところは大青色を呈し氣味のところもある。また3は高台内側が盛胎となるのに対し他のものは観察される限りでは高台脇のやや上部の位置から盛胎になっている点が異なる。胎土はいずれも砂粒を含む沙分の多いもので、盛胎部が赤褐色を呈するのは鉄分を多く含むためと考えられる。なお、この種の皿類で注意されるのは皿の内面に貝の目跡をもつてることであり、大きな破片（7個体）ではすべて観察でき、その数はそれぞれ3個である。計測できるものでは貝の横最大巾は2.2センチから3センチである。なお、4と12の資料は窯体の出土で他はC-0区出土資料が大多数である。

図29の13~18は碗である。13・16・17は失透性の土灰釉が、14は明緑色の土灰釉が、15は青味を帯びた失透性の土灰釉が剥けられている。13はやや斜日にのびて丸い口唇部をもつ。釉面に細かい貫入が見られる。胎土は割れ口を観ると暗灰色で沙分の多いものである。14は腰が張って胴部にロクロによる凹凸をもつことで腰から下に笠削りが施されている。15も同様に胴下半で届釉して胴部にアクセントをもつ。胎土は非常に沙分の多いもので割れ口が明薄茶色を呈す。16は口縁の下方で稜をもつて上方にはほぼ垂直にのぼる碗で、胴の下三分の一は笠削りによって調整されている。また内面も外面よりやや上位の口縁下で稜をもつて届曲するのがこの碗の特徴である。胎土は沙分の多いものであるが夾雜物も多く含んでいる。17は窯底の一部が落下したもののが溶着している。図は復原して合成したものである。釉は失透性土灰が高台内を含

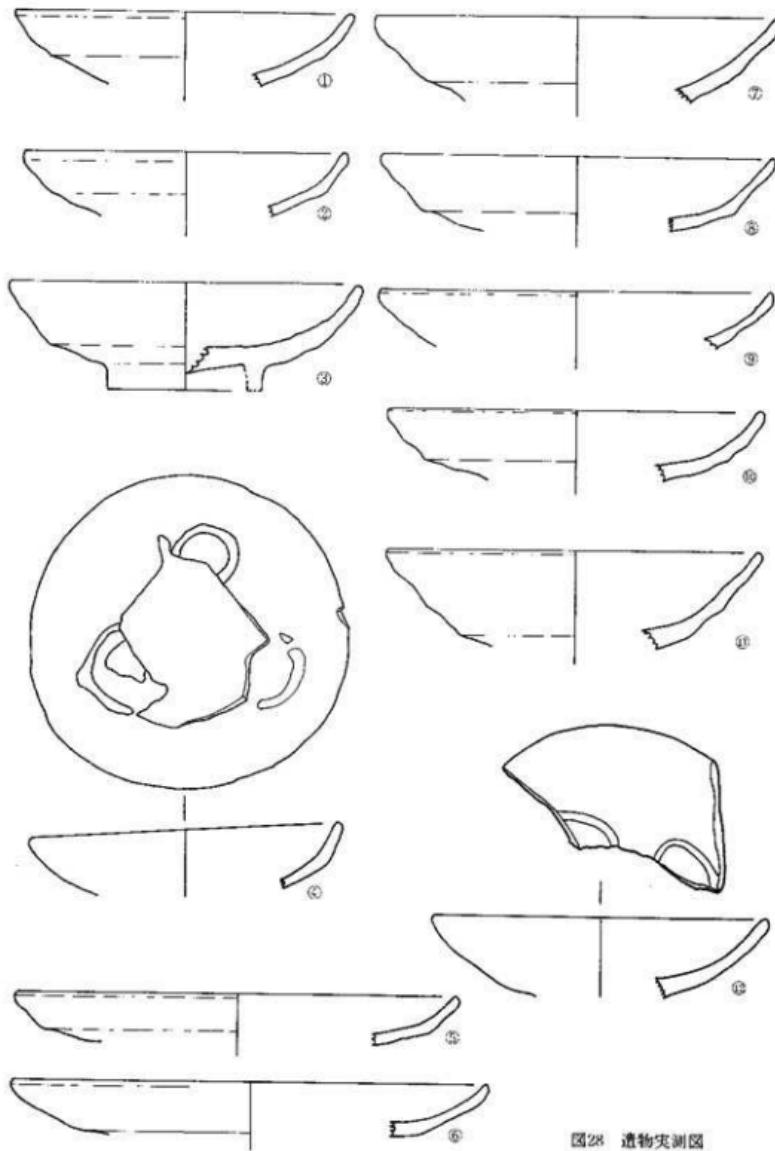


図28 遺物実測図

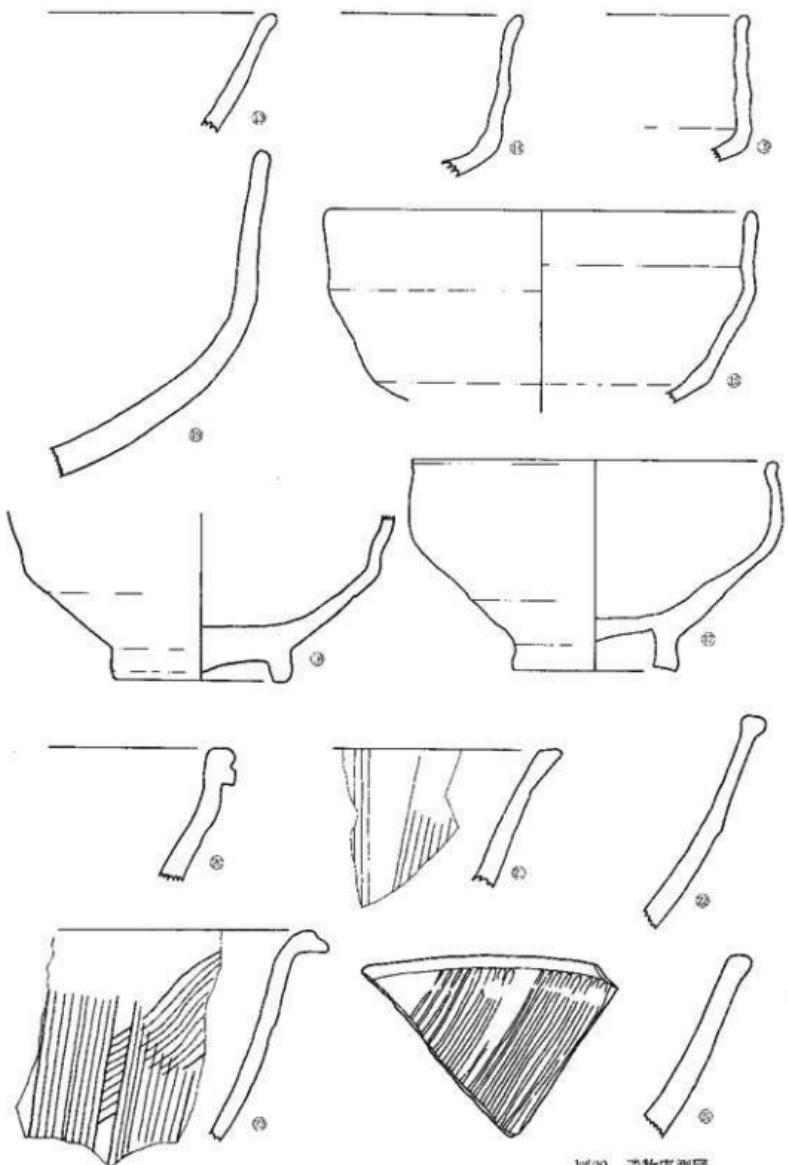


図29 遺物実測図

め縫掛けしてあり、高台疊付の3箇所に貝の日跡と思われるものが観察される。また一部に布跡と思われるものもある他、胴下半に土灰釉の被った陶片が附着している。腰の下2分の1が箆削りと考えられ、器形は18に類似するものであろう。18は素焼きの碗である。成形時のロクロは右回り、腰の下方と高台等の削り時のロクロは左回りである。腰から下に縫をつける削り高台内の兜巾、腰部から相当直線的に上方にのぼる器形の脚子などから17と同種のものである。なお、高台疊付に3箇所日跡が残っている。

図29の19は鉢である。制中程まではゆったりした曲線を描き、その上部は外反気味に立ち上り上がっている。口縁内面に緩慢な凹線をもつ。また外面の胴下半は削りによる調整が行なわれている。砂分の多い胎土に、カキ目をつけて薄く失透性の土灰釉をかけ一種の文様風の効果をみせている。

図29の20~24は描鉢である。口縁部の形態は多様で、20は外側に折り曲げて口唇部を肥厚させたもので、肥厚部に条溝が施されている。20も胴下半の外面に箆削りが施されており、境界に段がついている。21は口唇部を平らに切り取ったようになっている。22は口唇の上部を押して平らにした上で内外にふくらみをもっている。この描鉢も外面の胴下半を削って調整している。内面の条溝はかなり密に施されている。23は口唇部が平らになる外反させて上げている。これも胴のかなり上部から箆削りによって調整している。内面の条溝は10本を単位に施されている。24は口縁をやや外反気味にして口唇を平らにしている。内面の条溝は口唇の位置から8本を単位に施している。

描鉢は焼きしりに差があるが軽して砂粒を含む胎土で鉄分も含むので赤味を帯びている。

図29は、B-0区・C-0区の資料が大部分である。

図30の25~27は、平底で口縁近くに段を有する皿で失透性の土灰釉が暗灰色の胎土になじんでいない。ロクロ成形後内面にカキ目を行なっている。28は口縁が外反してのびるもので外面胴下半箆削り、内面ロクロ成形後にカキ目をていねいに施して薄く土灰釉を施す。29は糸切離しの底部のままで黄緑褐色の土灰を底部を除いてかけている。底裏にあるいは貝であろうか日跡が残り、内面には貝の日跡を残している。胎土は砂粒を含む砂分の多いもので赤味がかったり。30は皿の底部であろうか。糸切離しのものを削って高台を造り出している。胎土は砂粒を多く含むもので赤褐色を呈している。高台疊付及び内面に貝の日跡が見られる。釉は良くとけた明緑色の土灰釉である。31は高台の高い皿で失透性土灰の縫掛けで内面カキ目が施されているところから口縁部は25~27のように段皿によるものと考えられる。疊付に日跡4個が残る。32は高台の一端が削りとてあって割り高台になっている。内面にはカキ目が残っている点から皿の類であろう。33はC-0区の南壁の窓櫻塊に接まれていたものである。高台は高く外反しており、高台内の胴部との境目に接合した痕跡が見られるので付け高台であろう。すな

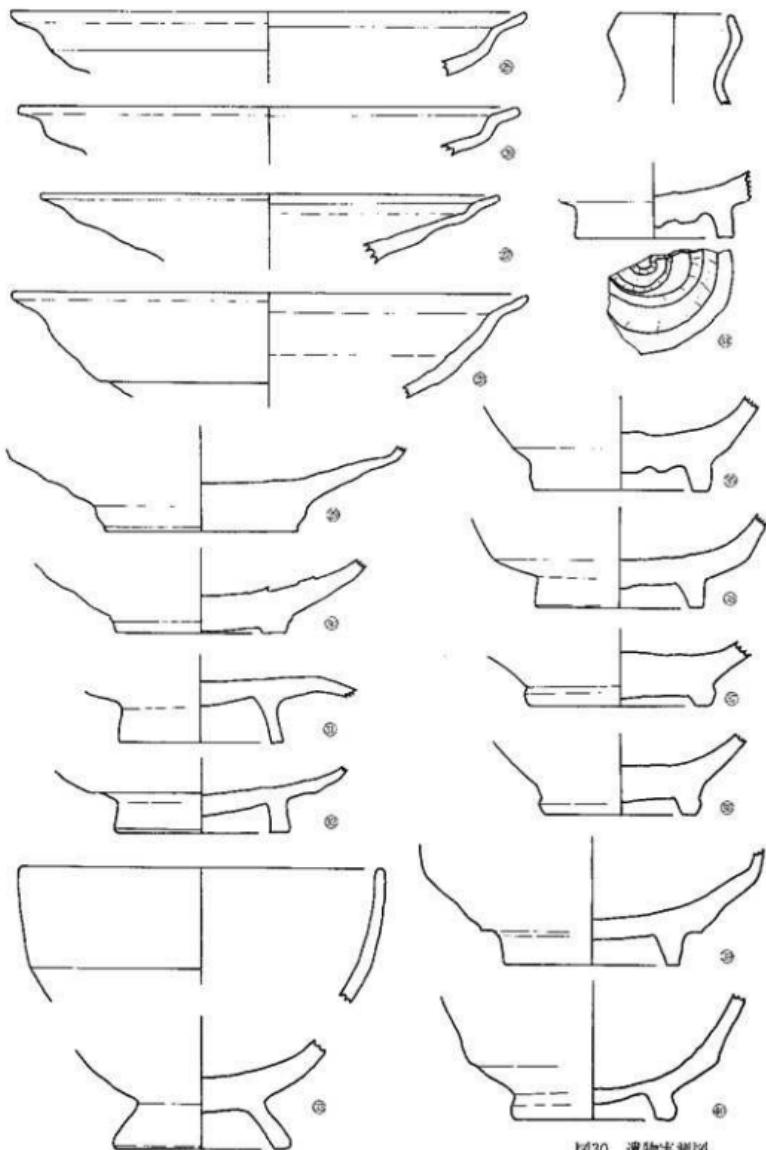


图30 遗物类图

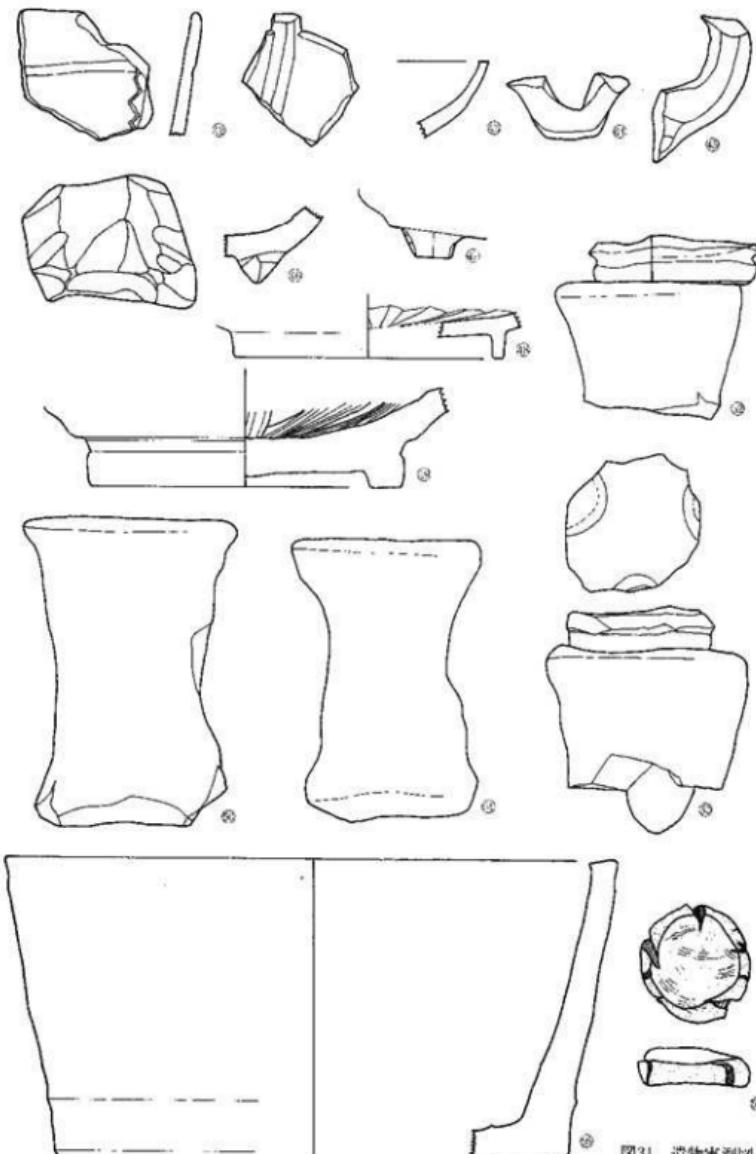


圖31 遺物實測圖

おな跡品である。34・35は素焼きの碗である。ロクロは右回りで高台内のグリグリ文様の削り込みは「の」の字を示して右回りロクロによって行なわれている。高台脇も範削りを行なっている。高台内を「の」の字状に溝を削っている例は他にもあるが、施釉してあるものでは失透性の薺灰釉が縦掛けにしてある碗がある。また36・38も素焼きの碗であるが、内面は逆「の」の字のロクロ痕をとどめており右回りロクロによる成形である。また38は高台脇が窓でしっかり削ってあり、竹の節高台になっている。この手のものは高台内に小さな兜巾をもつ。40は旗軸してある例で、背味を帯びた白濁の失透性の薺灰釉が縦掛けしてある。日跡は高台に4個所ある。41は瓶の口縁部である。失透性の薺灰釉がかかっている。

図31の42は碗である。口縁下に回線を施し、脇脇に堅に鋸歯文を細かい鋸先状のもので施している。43は皿で口縁部を範切りしている型物である。44は把手というより向付のような角い鉢につく足と考えられる。白濁した薺灰釉が流れている。45は把手ではないかと考えられるが、白濁した薺灰釉がかかっている。46は素焼きの碗で内面目込みにはカキ目が施されている。外面は窓による削りが縦横に行なわれており、高台も削り高台になっている。47は失透性の薺灰釉がかかる皿である。削り取った笠面を残す足がついている。48は型物で菊花形をしている。この資料では布日が確認されないが同種のものがあつて、内面は布が押しつけられて型取りされている。失透性の薺灰釉がかかっている。高台内に大きな日が附着して残っており、其土が使用されている。49は捺鉢の底部である。非常に砂粒の多い鉄分を含む胎土である。50~53はトチンと呼ばれる薺道具である。夾雜物を含む光い胎土である。51は3個所に貝の日跡が残っている。52は上部に薺灰釉のかかった背味がかって白濁する碗の底部が附着している。内面に1個所壁の小片のようなものが附着しているがこれが日跡として利用されたか定かでない。53は上面に土灰釉のかかった皿の高台部分が溶着している。皿の内面には貝の日跡が3個所残っている。54は径約4センチあまりの焼台(ハマ)で、一方が半らで一方がやや甲高くなっている。手づくねで成形されている。同種のもので径の大きなものもある。55は口縁をなでて平らにしており、外側はナデ調整によるロクロ痕がついているが、内面は粘土結成形による叩き締めの痕跡が顕著で、その上にナデ調整の跡がみられる。窓道具の一種である。

V 檜 討

今回の発掘調査で得られた知見はIV章に見る通りであるが、従来の資料を併わせいくつかの事項について若干の検討を加えてみる。

- これまで知られていた唐人焼窓跡に関する唯一の文献資料は『古賀記』である。『古賀記』⁽¹⁵⁾は文化9年に没した尾崎太左衛門が記し、文政4年に渡辺源空が増補を行なったものである。尾崎太左衛門は広石村庄屋尾崎家の出で近隣の福川村・田丸村の村吏を勤めた人物である。

『吉賀記』全三巻の下巻は下領組之事が村別に記載されているが、福川村の項に「唐人屋文禄慶長年間秀吉公朝鮮御征伐の時斎藤市郎右衛門信貴召賞したる李郎子と云唐人和名又右衛門と改名し朝暮の懸に異様の焼物を貯仕す」と筋深な本文があり、続いて長文の附録が掲載されている。⁽⁶⁾

附録の内容は、元様乍間に吉良邸に入りした播州赤穂の浅野内匠頭家中武林唯七の娘と名乗る者が、諸國神社仏閣を順拜し、先君父母の菩提を弔い江戸へ下る途中、現在の徳山市に宿をとり病に伏した際、宿の主人に語ったものである。要約すると、武林唯七の先祖は慶長2年の秀吉朝鮮出兵時に浅野幸長の軍と蔚山で戦って生捕られた唐土武林土の嫡孫で武林降という人物である。この時武林降の一族で李郎子という者が同時に石州三本松城主吉見長四郎元頼の配下の斎藤市郎右衛門に生捕られて捕虜になり、帰朝の節に召賞となつて三本松の片傍の杉ヶ峰という所で朝暮の懸に焼物などを習つて暮したという。この話は、唯七が日傭父唯右衛門（武林降＝武林唯右衛門→唯右衛門→唯七）から語り聞かされていたので、この度若しやと杉ヶ峰を尋ねると物凄い深山で、土地の古者が吉見という殿様の時代に人質の唐人がここで又左エ門と名をかえて朝暮の懸に焼物などやっていたと聞いていたが、子孫もなし一代にして絶えたと話してくれた。辺境をみると、墓は草木が茂り、あまりに惜なく手向して帰ったが、李郎子の艱難苦労を考えると言葉も無いと泣いていた。街の主人が事の頬木を毛利侯へ届け、附人と銀手を与えられ江戸へ送り届けられたというので、この話は徳山の商客金屋右衛門が吉賀地方に伝えたと記してある。⁽⁹⁾

なお、渡辺源宝の追加になると考えられる文書があり、それには、武林唯七の娘が老年に及んで諸国行脚とあるので、寶永三年ではなく、寶暦二年ではあるまいか。寶永では二十餘りの令年になってしまい、寶暦なら七十前後になると考察している。

いずれにせよ、この附録の部分は錯誤があり、より慎重に検討せざるを得ない内容を多く含んでるので後考を待つことにしたい。

今一冊、『吉賀記』よりさらに時代が下った文献として、文久二年に斎藤絲十郎によって記された「福川西村古新吉他覺記」なるものがあるが、唐人焼については内容が吉賀記と同じでその要約版といって良い。

文献に見る限りでは以上の通りである。『吉賀記』自身も緻密な書誌学的考察を受けたとは言い難い面があって検討の余地は大いにあるが、本文として記された数行についていえば、あるいは当該地域の古伝を良く探詰めていると考えられなくもない。

2. 李郎子に関係するものとしては墓と伝えるものが現地に残っており、これまでにも何度か紹介されている。⁽¹⁰⁾

唐人屋の前を通る往還を少し下って山側へ入ると墓跡があるが、その右手前に現在尾敷地

があり、下段は畳になっている。畠は石垣で保護されているが、その畠の一角に一辺30センチ位の角石を巾1メートル65センチの範囲に3、4段積んだ石垣があって、畠石はその上に立っている。

畠石は上部が斜めに尖っており、下部は差し込み式になっている。この上部の全長は88.5センチで、差し込み部を除くと81センチある。上端の巾が26.3センチ、中間で26.2センチ、下方が24.8センチで、下端になるにしたがってやや巾が狭くなっている。畠石の厚さは上端で11.5センチ、下端で11.2センチである。差し込み部は巾が10.7～9.5センチで厚さが8.3センチである。

この基石が16.7センチの厚さの受け部に納まるようになっており、さらにその下に巾55センチの台石が置いてある。

畠石の正面には大きな文字で「帰久賀洋定門口靈位」とあり、右横にやや小さく「寛文四月六日」、左横に「六月八日」とある。

この基石が李郎子の墓とされた理由は判然としないが、福川地方で時代が下るに従ってそのような伝承が出来上がったものであろうか。『山陰の陶窯』で伊藤菊之輔氏が記されたように、これを附近の墓と併せて夫婦の墓とすることはもちろん、前述した一基についてもこれを李郎子の墓と断定することは現時点では困難と言わざるを得ない。また伊藤氏が李郎子の妻の墓としたのは、20メートルばかり山側に数基の墓が並んでいるものを取り上げられたものと考えられるが、これは『沖和野町史』（第一巻）で沖本常吉氏が指摘されたように木地師の墓であろう。

したがってこの墓碑銘からは李郎子との関係をうかがわせるものは、他の伝承を採用しても、つかみ得ない状況にある。

3. 『吉賀記』の福川村の条の追加の部分に遺物の記載があつて「唐人屋浅黄土、明和の頃度御庭御用に成」とあり、この地区から陶器に適した陶土を産出していたことがわかる。御庭御用というのは津和野藩の八代藩主矩貞が大阪の陶工長兵衛を呼んで始めたと伝える焼成のことである。

また同じ『吉賀記』の上巻の吉賀地方の概略を記した中に七鼎の項があつて「白真砂………黄土・田丸塔ノ峠往還下に有又朝倉重石後に生す、附・唐土あり、白土………、浅黄土・福川唐人屋道上にあり」とここにも記載がある。

今回の調査ではこの浅黄土の産出する場所は確定することが出来なかつたが、窯体部分の丘陵斜面の粘土の組成分析等を島根県工業試験場に依頼した。その結果、この部分のものは粘土分が少なく成型に困難であり、粘土組成上も綠泥石を含んで適していないというご教示¹²があった。

この点は今後の調査研究の課題である。

4. 窯体部分の造構については周辺の地形に変遷があって危惧されたが、焚口と窯尻にそれぞれ近いと考えられる燃焼室が二ヶ所で確認された。全体についてはなお明らかに成し得なかったとはいへ、約30度という異状に急な傾斜を持った面に築かれた窯で、5室（房・袋）前後の室を持ち、およそ全長15メートルを越えないであろう比較的小規模な窯であることを推測させる。また、その燃焼室の砂床の最大巾は2メートル60センチ、砂床の奥行きは80センチ以上あり、火床は通焰口の柱を含め40~50センチの奥行きを持つ。通焰口には8本の柱があり、砂床と火床の段差は約20センチである。

これを他の西日本の陶器窯と比較すると、やや時期が古いためと考えられている唐津焼飯糰窯下窯で全長17メートル、約15.5度の傾斜で8室の燃焼室を持つ。室の巾は2.2メートル、奥行きは2メートル、火床の奥行きは約20センチで砂床との差は30センチ、温座の窓といわれる通焰口は7、8箇ある。近くの帆柱窯はやや勾配が強く20度近くある。

度長期に前後して開窯されたと考えられる上野焼釜ノ口窯では15室全長41メートルの大規模なものであり、同様に高取焼内ヶ磯窯で14室全長46メートル約19度の傾斜を持つ窯が築かれた。

秋焼で古いためと考えられる坂1号窯は12室の燃焼室をもち、全長28メートルで、上に行く程急で傾斜角度は通算して21度ある。

また美濃の元岸敷窯は14室の燃焼室をもつ全長21メートルの窯で、通算26度とかなり強い傾斜をしている。

以上、近世の初頭に普及した階段状連房式登窯の初期の窯の概要を記してみたが、窯の全長では短かい方に属し、燃焼室は少なく、最も急な傾斜を持って築かれた窯が唐人焼の窯であるということになる。これは極めて少人数による操業形態を窯がわせるものである。

5. 遺物としての陶片が相当数得られたことは、今回の発掘を特に意義のあるものとした。それはIV-2の項に記した通りであるが、他の資料と比較し易いように整理してみると、この窯で焼いた器の基本的な形態は皿と碗であり、若干の壺鉢が含まれ、少量であるが文様を持つものや、足の付く角鉢、手鉢や菊花形の型物が見られる。また、鉢や皿にロクロ成形後に内面にカキ目を施して薄く釉をかけているものがある。

なお、焼成の際の窯詰めの方法としてトチンを使用しており、小さなハマや匣と考えられるものも一点づつ出土している。なお、甕類には小磚を日として用いているものも多い。

窯人焼の出土品は一見極めて貧弱そうに見えるのであるが、発掘された他の一、二の窯の資料と比べてみると、一概にそういう風に言い切れぬ面も看取される。

すなわち、初期萩焼の実態解明のために調査された萩の坂1号窯では約二千点の陶片の内、

約十点の茶碗片と二点の茶入片が含まれてはいたが、他は碗・皿・鉢・擂鉢・杯等の11用器なのであって、量の多少を問わなければ器種の構成に大きな差はない。また本年行なわれた高取焼内ヶ磯窯跡の調査においても日常雜器としての碗・皿・鉢・瓶・片口・擂鉢が七割方を占め、本来的な生活基盤は住民の要求に応じたものとされている。茶闇園絲品の二割という数字はさすがにこの方面で著名な内ヶ磯窯のことであり、唐津燒飯糰下窯でも出土する陶片の上たるものは窯や甕や鉢の日常雜器といわれている。

今後ますます増加する窯跡の発掘調査はこうした焼成品の実態を追認するものとなるであろう。これまでの茶陶を中心とした恣意的な採集を別にすれば、日常雜器を中心とする茶陶を焼成したというのがこの一時期の一般的な在り方であり、店人窯の成果は小規模ではあるが、こうした傾向を踏んでいるといって過言とはいえないであろう。もちろん、北九州の諸窯の多彩な展開に比べべくもないが、特にそれらの中でも初期に開窯したと伝えられる窯の内容に、器形や釉薬・窯詰め法などが、近いことは注意されるのである。

- (5) 昭和56年に六日市町教育委員会が発行した『古賀記』を参考にした。昭和56年六日市町教委本は尾崎大/田中豊昌の筆、渡辺源實の増補になるもので、立河内村の卜森氏のために渡辺氏が天保14年に記したものと、明治19年松浦寅順が写したものである。その後昭和9年埴砂原岩吉が書写し、昭和26年七日市村に寄贈され、現在六日市町に引継がれている。
- (6) この附録の部分は色々な要素が含まれて検討せざるを得ないことが多い。例えば唐人という言葉の使用法などであるが、他に錯誤もあり、これについては今後に残した。
- (7) 文禄の役には吉見元頼が出陣したが、文禄三年没しており、慶長の役には吉見広行が出陣した。
- (8) 天文八年三ノ瀬城を築いた。
- (9) 註 (6)に同じ。
- (10) 福川円通寺所有の資料。
- (11) 註 (2)に同じ。
- (12) 島根県工業技術センター酒井科長の分析によると、鉱物組成は石英・長石・綠泥石・雲母粘土鉱物等であり、普通粘土分(粒度2μ以下)が35~45パーセントであるのに11.2パーセントしかないということである。これを1200度で焼成すると淡桃色を呈し、よく焼結するということであるが、意見としては、粘土分が少なく可塑性に乏しく綠泥石は高温焼成に適さない。したがって唐人窯で使用された粘土は別の所で採掘された可能性が強いという結論であった。
- (13) 他の窯の資料は『世界陶磁全集』7、小学館、昭和55年他による。

VI まとめ

島根県鹿足郡柿木村福川字唐人屋に所在する窯跡は、当地方の古記録である『吉賀記』に、文禄・慶長年間、朝鮮より渡った店人李郎子が開窯したと記載があり、村史編纂事業の一環としてこれを発掘した結果、その内容は出土した陶片等から、極めて蓋然性が高いことが証された。

その結果は、村史のみならず、近世初頭の西日本窯業実態解明に非常に重要な資料を提供することになった。



1. 唐人屋・杉ヶ森遠望



2. 伝季郎子墓



3. 窓跡遠景



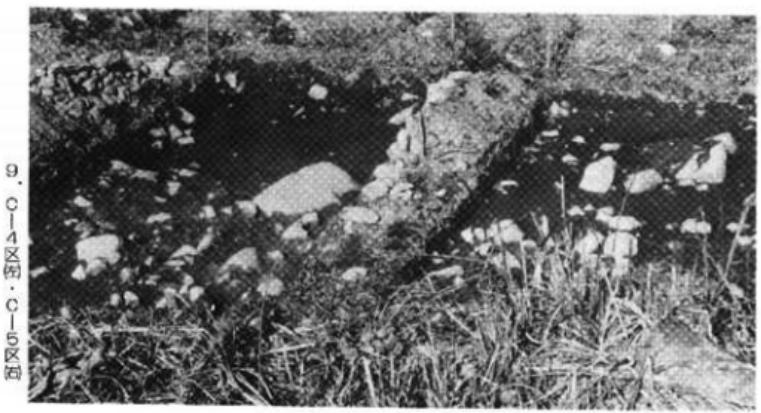
4. E・F-O区



5. E・F-O区部分



6. D-O区



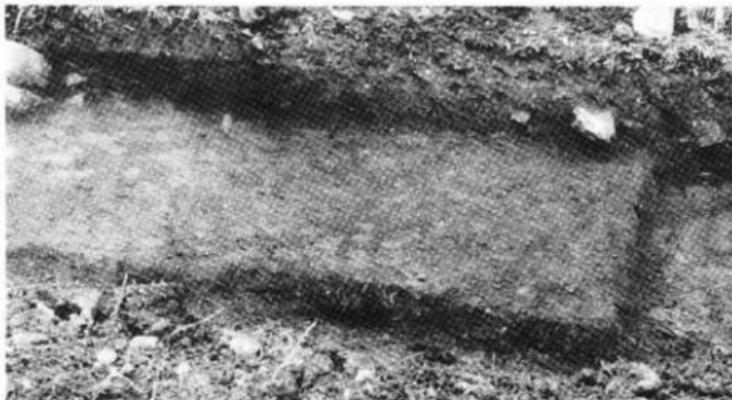


10. C-4区



11. C-5区部分

12. C-2区

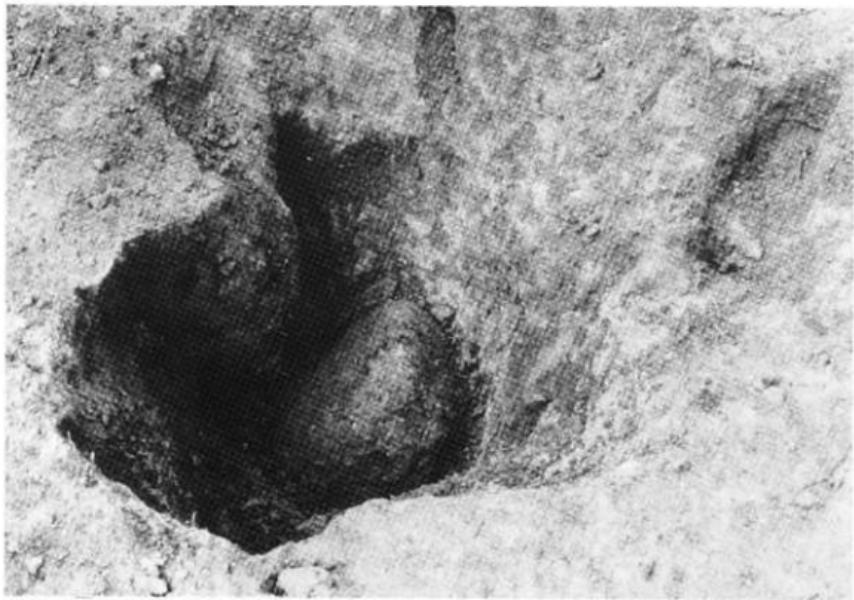




13. C-2区



14. C-2区土壤



15. C-2区土壤

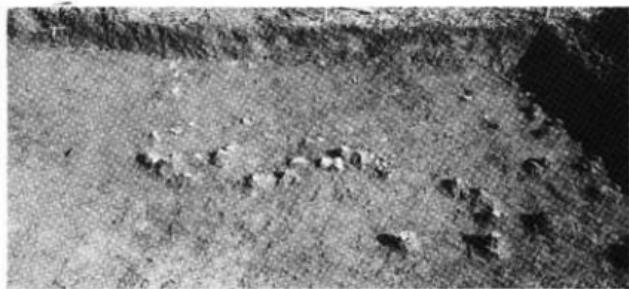
16
C—1区



17
C—0—1区



18
C
沙嘴区





19. B-O区



20. B-O区



21. B-O区(左)・C-O区(右)



22. B-2区



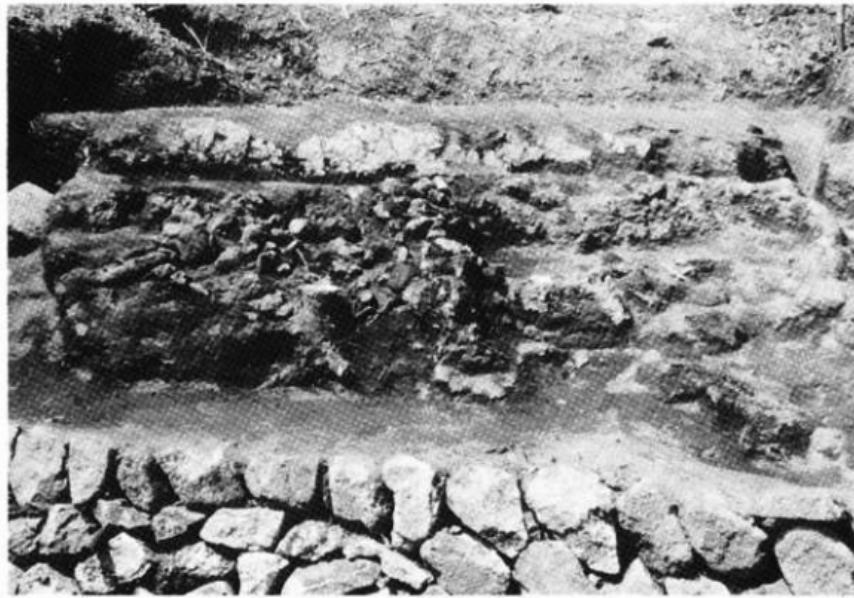
23. B-2区



24. B-2区



25. M区



26. Y区（黑部分）



27. YY区（窯全景）



28. YY区部分



29. YY区部分



30. YY区部分





1



2



3



4



5



6



7



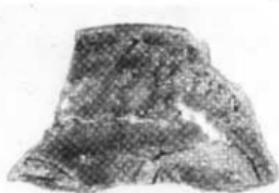
8



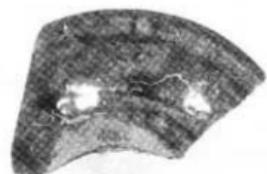
9



10



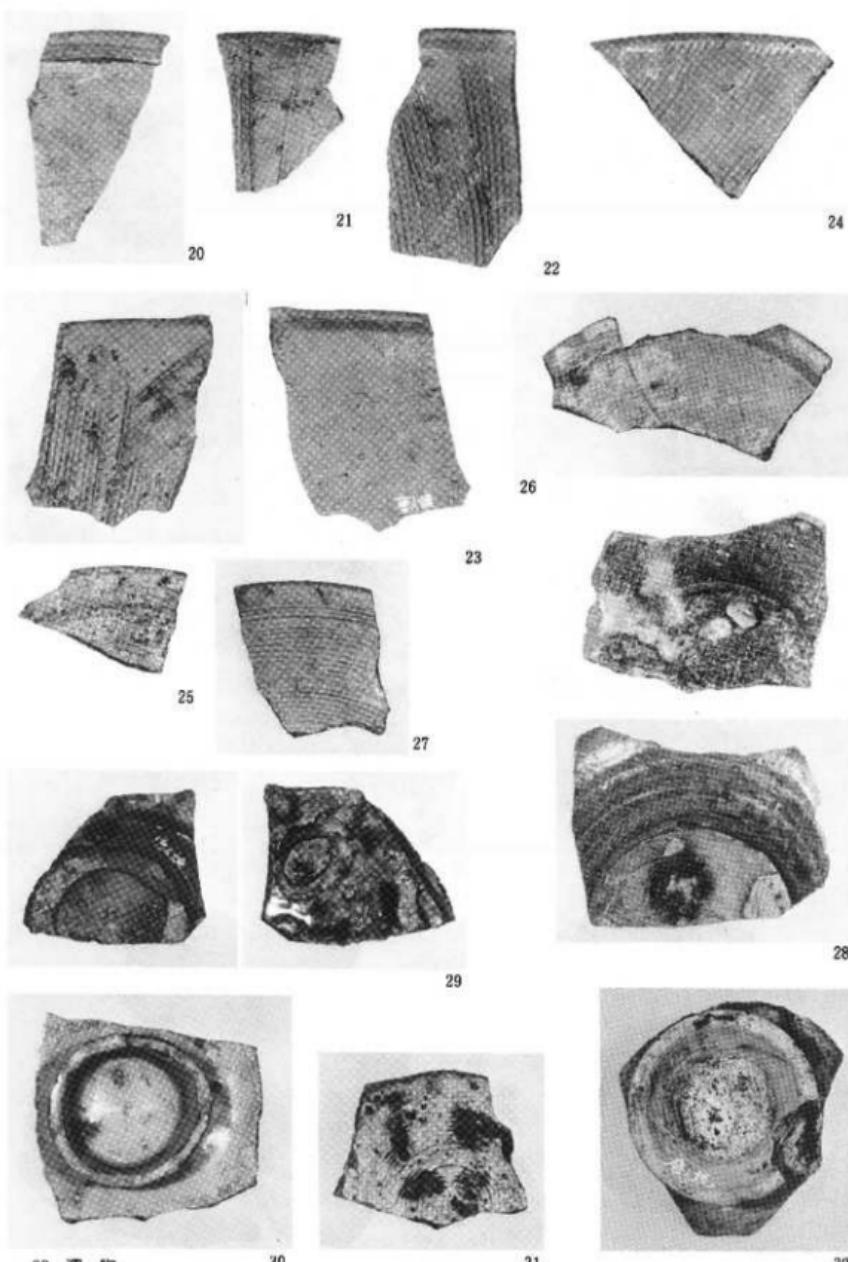
11



18

19

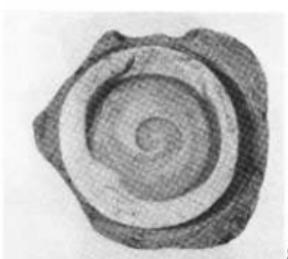
35. 遺物



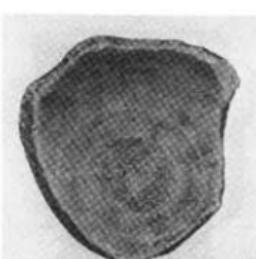
36. 遺物



33



34



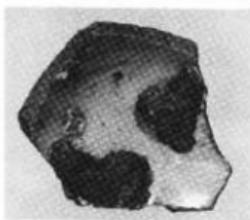
35



36



37



38



39



41



42



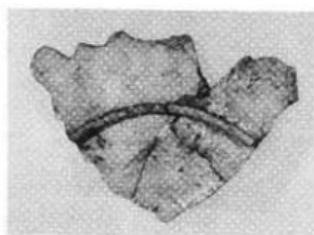
40



43



44



45



46

37. 遺 物



47



48



49



51



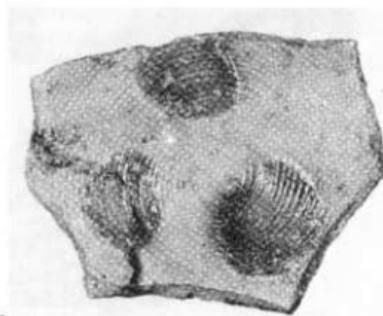
52



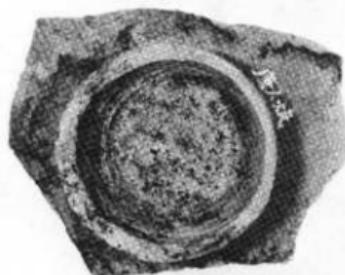
50



53



54



38. 遺 物



17



18



19



20

39. 発掘風景



21



22



23

40. 発掘風景

唐人焼窯跡発掘調査概要

昭和57年3月

発行 柿木村教育委員会
鳥根県迎足郡柿木村

印刷 ㈱都濃印刷